

「手筒山、金ヶ崎の兩城は、防戦叶はず、攻め落された。さながら決河の勢ひで、織田・徳川の大军は、もはや木ノ芽峠へ押し集つた。峠を越せば一乗谷だ。朝倉館存亡の危機ぢや、長政ツ、狐疑や逡巡の時無いぞ！」

と、久政が、聲を勵ます。

「あゝ！ さては誓紙が、謂はば八ツ裂き——」

長政は、暗然と首を垂れた。

（示威では無かつた！ 織田は本當に越前を——朝倉館を破滅させる心なのだ！）

實は、敦賀郡に侵入して手筒山金ヶ崎を脅かし、朝倉に異心の無いことを、誓はせるための軍事情動に過ぎまい、と長政には、今のいままで、思はれてゐたのであつたが、侵入軍が、木ノ芽峠へ押し寄せたと聞いては、信長が、朝倉を滅ぼす意志をもつて、出馬したに相違ない事がわかつた。

「父上！」

「ちえゝ女々しいぞ長政ツ、この期に及んでも、まだ市姫の情にひかざるゝのか、これさ引かるゝのかツ痴氣！」

久政が叫ぶと、

「あいや父上、何を仰せぞ、長政のためらひは、決して決して、聞の情のためならず。妻の色香に心

蕩かす拙者で御座らうや！」

と、長政もまた語氣を、荒くすると、

「おのれ舌長しツ！ 心蕩けずば、なんで起たぬツ！ 何故の不決断ぢやツ？」

「父上！ 拙者の躊躇は、わが家、浅井の運命を、賭けなければならぬ向背なればこそで御座る」

浅井の父と子とは、信長の力に對して、評價が違つてゐたのであつた。

(四)

木ノ芽峠の麓——信長の本陣には、家康を上置きにして、柴田勝家、明智光秀、森三左衛門、丹羽長秀、佐々成政、佐久間右衛門、前田利家、木下藤吉郎といふやうな諸將が、集つて、額に紙を寄せたり、ぶツつりと面白からぬ眼れ面を見せたり、心配さうに首を捻つたり、青ざめた顔で、溜息をついたり、表情と舉動とは、各人各様だが、誰も彼も、みな同じく、

（どうする？）

と、考へる點では、一致してゐた。

「いかゞ、被成れる？」

さう、云つたのは、家康だ。

信長が、微笑して。

「驚いたよ全く」

と、云つた。家康は、

(微笑が泛ぶくらゐなら、氣丈夫だが、それにしても——)

驚いた事の無い信長が、今度ばかりは本當に、冗談でなく驚いたらしいので、自分が警報を聞いた時に、信じられなかつたのも道理だ、その筈だ、と心算に、自己辯護を試みると、いくらかは胸のうちが、暢びやかになるのだつた。すると、

「最初は耳を疑つたぞ、あツはツは！」

と、信長が、つひに笑ひ出した。

笑ひ聲は、列席の諸將の愁眉を、開かせたのであるが、その時藤吉郎が、進み出て、

「館！」

「なんだ？」

「お笑ひ事で御座りませうか？」

「わツはツは、だけど泣き事を云つても始まるまいが」

「始まります。早速、始めなければ相成りませぬぞ！」

と、藤吉郎が答へた。

猿も今は出頭して、諸將と伍すことの出来る身分の、立派な將校の一人となつてゐた。

だが、信長は相變らず。

「猿つ！」

と、呼んで、

「なにをおツはじめめるのだ？」

「退却をで御座ります」

藤吉郎は、一介の猿の時分なら、こんな場合、「退却ですよ」と云つたに違ひないが、この頃はだぶ言葉尻も丁寧になつてゐた

「退却を、始めるのか？」

「はい、大々至急の御退陣こそ、この際の、最も適當な御軍法かと存ぜられますが、いかゞで御座りませうか？」

「いやに宜い言葉を、使ふ」

「御退陣は、お氣に召しませぬか？」

と、藤吉郎が、訊き直す。

「氣に入るも入らんも、有るものかッ」

「折角こゝまで、とさう思召すかも知れませぬが、浅井殿が反覆して、裏切りまするに於いては、大荷駄、小荷駄、兵糧兵站の道を、うしろから斷ち切られまする」

「馬鹿野郎ッ、兵站の道を、前から斷つかよ？」

「前からは、朝倉が斷ちまするで」

「わッはッは、猿めかしい事を云ふ」

「で、御退陣の儀は？」

「うるさいな！」

「しかし一旦、お退きに相成るほか——」

「無いよ」

と、信長が云つたので、

「え？」

さすがの藤吉郎が、目を白黒。

「退却に、異議はないか？」

信長は、ぐるりと諸將を、見廻すのだつた。

(五)

「異議があつたら、前に出るッ」

信長は、さう繰返した。

「誰もないのかッ？」

大きな聲で、嗚鳴る。人々は、

(どちらが官いのかな?)

異議の、有る方が氣に入るのか無い方が心に叶ふのか、見當がつかない。

いふまでもなく、浅井の反覆はまつたく意外な突發事だ。朝倉の攻守同盟は、誰もが知る事實だが、この契約が實行されようとは、考へられなかつた。なぜかと云ふと、浅井の當主は長政で、父の久政はすでに隠居の身であつたからだ。そして長政は、信長と義兄弟の間柄になつた事を、心の底から本當に喜んでゐた。市姫との交情は、いはゞ膠で着けたよりもシツクリ行つてゐた。

だから、浅井が裏切らうとは、思はれなかつたからこそ越前へ、侵入したわけだ。

隠居の久政が、反信長聯盟へ加擔してゐることは解つてゐたし、重臣たちの間に、久政と同一な氣持でゐる者も、決して少くないのも、想像出來たことだが、たとひそれらの意見なり主張なりが、表面化しても、長政は斷乎として、抑へるだらう。

抑壓するに違ひないと、決めて掛つたのが、とんでもなくおツばづれた。

すでに斯うなれば、萬全な策は退いて、出直すことだが。

(館が、誰も考へ泛ぶやうな、萬全の策などを?)

果して、おとりになるだらうか?

(桶狭間の奇襲をなされた館ではないか)

といふ、氣がする。

(朝倉と、淺井に、腹背から挟み撃たれたにしても、戦が負けとは限るまいに)

さう思つたのは、柴田權六勝家だ。

ところが信長は、

「權六、そちは何故、ツン出ないのだ?」

と、云つた。

「は—」

柴田が、出かゝつた時、

「今夜、さつそく陣拂ひする」

信長は、總退却を命令して、

「殿軍は、猿、汝に申付けるぞ。」

進むも速いが、退くのも早い。

速力第一主義は、じつに遺憾なく發揮されて、忽ち全軍の陣拂ひが決行された。

木下藤吉郎は、手勢七百で殿軍の重責を引受けたが、これを援けたのは家康だ。徳川の兵だつた。

この退却は、後に、「金ヶ崎退陣」といはれた。退かずに信長が、もし戦つたなら、非常に不利な戦闘をしなければならなかつたらう。挟み撃たれても、むろん兵力に不足は無かつたが、地の利が悪かつた。敦賀郡は、一方は海、一方は山脈で、前と後から敵に扼されると、動きのとれない地形だ。

信長は、戦場を選択することにかけては、全く驚くべき炯眼を有つてゐた。

地形が、不利な場合は、思ひ切りよく退いてしまふ。

若狭から、湖西へ出て、朽木谷。

朽木越えは、江州の高島郡から、京都へ通じる間道なのである。

信長は、この間道を京都へ、戻つた。

だが、家康は別路をとつた。それは若狭の小濱から、針畑を越え、鞍馬山を経て京に還るといふ道だつた。

姉川合戦

(一)

別々な路を通つて京都へ還つた信長と、家康とが、ふたゝび出合つた時、

「ひどく縮尻つたよ」

「千慮の一失は、館にもござらう」

「出直す」

「湖水の東から？」

と、家康が訊ねた。

琵琶湖の東岸を進撃して、堂々と浅井領へ、正面から攻込む——それを、「出直す」と云つたものとさう解釋したのである。

「ちがふ」

と、信長は答へた。

信長の出直しは、もつと根ツからの出直しだつた。

「お身は、濱松から出直すのだ」

「え、濱松から？」

「左様」

「國まで一旦、引揚げるので御座るか？」

「予も岐阜から出直す」

「はて？ それにも及びますまいに！」

「さうは思はん、第一歩から出直す」

信長は、まるで出直すの一點ばりだ。

「なにか、必要が御座らうか？」

「ケチの附いた時は、出直すに限る」

「それは解ります。けれど何も岐阜や濱松まで、遙々と——」

「否、さうでない。大きな効果を擲まうとすれば、出直しの方も、ヤツぱり大きくないと不可んよ」

信長はあくまで、大きな出直しを言ひ張つた。

(大きな効果？)

家康は、考へてみて、

(と、するとは是れは、浅井、浅倉を、徹底的に、打倒しようといふ手段の、建て直しの爲だらう) さう思つたので、

「では濱松へ」

と、同意を與へた。

「物解りが宜い。だから好きさ」

信長は、吉法師、竹千代の昔に還つて、ボンと家康の肩を、叩いた。

織田と徳川は、大軍を京都から國へ引揚げることにした。

そして還軍の道筋を、千種越えに定めた。

浅井領の通過を避けたのだ。

江北を通らうとすれば、勿論、戦はなければならん。信長は、効果に乏しい戦は、嫌ひだつた。

千種越えといふのは、江州から伊勢へ越す峠路の一つだ。

つまり、蒲生の日野の城から、音羽、田津、畑山を経て、伊勢の三重郡、千種の里へ出る、峠なのである。

路は、峻しく、谷が深く、樹木亭々と、千古斧鉞を入れぬ蒼鬱さで、晝なほくらく茂つてゐる、間道だ。

だが、馬に練達な信長は、その峻岨が、並々でなく氣に入つた。

「こりあ宜い！」

と、頻りに賞めた。

「素敵だよ、野ツ原で生れて、平ら場で育つた俺には、本當に珍し！」

恰度、さう云つた刹那！

ダアーン、ダアーン！

と、響くは二ツ弾。

その一弾が、ヒューツととんで来て、貫く胸腹の袖、人々は、

(呀ッ！)

と、顔色を失ふ。

(二)

二つ玉の一弾に、帷衣の胸腹の袖を、うち貫かれても、信長は、

「あわてるな！ 何を騒ぐツ！」

と、顔色を青くした側近の者どもを、叱りつけた。

響いた銃聲は、谷に木魂して、それが、重ね撃ちのやうにも聞えたので、兵どもは噪ぐなど云はれ

ても、騒がずにはゐられない。

鐵砲の發射された方向へ、喚あ喚あ、どよめきながら、走つてゆくのを、信長は、再び嗷鳴りつけて、曲者を捜すことを、制止止めた。

「やめろ、やめろッ！」

悠然と、馬を歩かせたのは、大膽無類といふほか無かつたらう。

「最初に狙つたのが、外れるくらゐで、二度目が、なんで當るものか！」

信長は、さう云つたのである。

むろん、運が強かつたに違ひない。狙つたのは、杉谷の善住坊といふ、鐵砲の名手で、翔けてゐる鳥でも、射ち損じたことがないといふほどの、腕の冴えをもつてゐたのであるが、さうした名人でも旭日の昇るやうな運勢の人にかゝつては、叶はぬものと見えて、帷布の袖を、打ち貫きながらも、信長の肉體には、かすり傷一つ着け得なかつた。

この善住坊は、信長のために、領地を奪はれた六角承禎入道の側近者で、入道に言ひつけられて、信長を途中で、狙撃したのだつた。

信長が、岐阜に歸つたのは、二十一日であつた。言ふまでもなく、家康も、一旦濱松へ引き揚げた。

だが、信長も、家康も、歸國すると同時に、次の出發の準備に取りかゝつたので、席が暖まる迄などは、無かつた。

翌月十九日、大軍は再び、岐阜の城下に集結を遂げた。

織田軍は、二萬三千、徳川軍は六千。

この聯合軍が、江州へ侵入して、浅井の本城、小谷の城へ迫つた。

森三左衛門と、坂井右近とは、兵を雲雀山へ遣つて、麓の町屋を焼き拂はせた。

信長は、二十一日に、虎御前山に着いて、そこに夜營した。柴田も、佐久間も、丹羽も、木下も、

附近の町屋の方々へ火をつけた。

城下の民家を焼き拂ふことによつて、浅井を威嚇したのであるが、浅井勢は、鳴りを靜めて、小谷の城から、出て來なかつた。

もしこの時、浅井の軍勢が、城から出撃したなら、相當な戦になつたに違ひない。

だが、城兵は、蝸牛の殻に潜つたやうに、城から出て來ない。

(仕様がないなア、出て來ない事には)

と、信長は思つた。

小谷は聞えた要塞だし、浅井の兵は決して、六角勢や、三好勢みたいな、弱兵ではなかつたから、いくら力攻めにしたところで、とても急に、城を陥落させるわけには、いかないであらうから、攻圍は長びく、そこへ後ろから、朝倉の軍勢が寄せて、城と互に呼應して、腹背から、挟み撃ちにしようといふのが策戦だと、さう睨んだので、

「いつも、柳の下に泥鰌は、ゐないよ」

と、信長は、云つたものである。

そこで、織田軍は、小谷の圍を解いて、急に枝城の、横山城へ攻めかゝつた。

姉川の大會戦の序幕は、かうして切つて落された。

(三)

横山城の陥落は、今や間近に迫つた。

この城は、本城の小谷の東南にあつて、臥龍山と呼ばれる小高い山の、頂きに築かれた出城で、姉川の岸に近く、平野を扼する大切な地點だ。

だから、こゝを織田軍に奪はれては、非常な不利に陥るので、

「後詰をしなければならん」

浅井長政は、さう云つて、小谷城を、ほとんど空にして、大寄山まで出て来て、陣を張つたし、越前からの援軍、朝倉軍も、姉川を前にして、展開したのだつた。

その時、信長の本陣は、川の對岸、龍ヶ鼻にあつた。姉川は、その水源を、東浅井郡の北の端に聳える金莢ヶ岳に發し、南へ流れて伊吹山の西の麓までくると、右へ折れて西へ流れる湖北第一の大きな川だ。

だが、川原は廣くても、水の流れの、幅はどれほども無かつたし、ことに夏は水枯で、徒渉りも容易だつた。

敵味方の兩軍は、この姉川を挟んで、對陣した。織田、徳川の聯合軍の兵力は、前にもいつた通り、合せて二萬九千だ。

これに對する、浅井、朝倉の聯合軍は、浅井八千、朝倉一萬、合せて一萬八千である。その比は、およそ七對四だ。

六月二十七日の夜は、すでに暮れてゐた。

川の兩岸で、焚く篝火の、數々が、月のない闇夜を、赤く照して、火の色を川水の面に映した。家康は、自分の本陣を出て、敵陣の篝火を眺めながら、信長の陣所まで行つて、

「少々、きつい御相談に參つた」

さう、云ひだしたので、

「ほう、きつゝとは、面白ソ」

と、信長が答へた。

「面白う御座らんのだ」

家康は、本當に面白くないやうな面持ちで云つた。

すると、信長は、一層微笑をふかめて、

「これは、いよ／＼おもしろい」

「館ツ、なにが面白う御座るか」

「そこちや、面白いのは。だが聞かうでは無いか、お身の面白くないといふ理由を——聞かなくても見當は、およそ附いてはゐるけれど」

「お解りなら、先づ承はらう」

家康は、いつになく、苦蟲を噛みつぶした様な顔を見せた。

全く、信長へ、こんな顔を見せたことは、これまでついぞ一度も無かつた。

よほど腹に、据ゑかねた、何かがあるらしかつた。

でも、信長は、

「わツはツはツ、云つてみようか？」

と、さも可笑しさうに、相變らずの笑ひ方をする、

「仰有いッ！」

家康が、よけい膨れ顔をした。

信長が、をかしさうな表情を、すこし消して、

「多分、違はんと思ふが、徳川殿は、豫備隊が、お氣に召さぬのだらう！」

と、云つた。

「左様ッ！ 左様で御座るッ！」

家康が、大きな聲で嗷鳴つた。

(四)

「館ッ、さればこそ、面白う御座らんッ」

「濱松、だから面白う御座るよ」

どこまでも、信長が、面白いの一點張りを、譲歩しないので、家康もつひ笑ひ出したが、直ぐまた眞顔になつて、

「拙者は、まだ三十前で御座る」

と、云つた。

「まだ若いよ」

と、信長は答へた。

「三十にも足らぬ若さで、この若さで御加勢に參つて、豫備の、後備のとあつては、てんで恰好がつ、き、申さん、館ッ！ 家康は、明朝の一戦には、一番の先陣を申し請けた」

「一番、困るよ、濱松どの」

「なぜ、お困りで御座るか？」

「濱松どの、一番は坂井に決めてある」

「御變更が願ひたいツ」

「二番は、勝三郎だし、三番は、猿めが頑張つてゐて、あはよくば、二番、一番へも、ツン出たさうな面をしてゐるし、どうも困るよ、濱松どの！」

「館ツ！ いけませぬよ」

「いけないとは、何が？」

「さつきからいやに濱松どの、濱松どの、と餘計などのづけなどなされて——」

「餘計なものか、肝腎な殿だよ」

「一番を申し請けたいツ！」

家康は、重ねて所望して、

「こゝで一番を申し請けかねたとあつては、末世末代までの、申し傳へに相成りませう故、迷惑で御座る。もし一番が叶はねば、明日の合戦には、御免を蒙つて、早速この場を引き拂つて濱松へ、立ち戻りまするぞ！」

「わツはツはツ！ 豪氣、豪氣！ だけど、さう鼻ツばしが強くては、困るよ濱松どの！」

「困るのは拙者で御座るツ」

「やりきれんない！ 仕方がない、俺の負けぢや。一番陣を頼まう！」

「お、辱けなう！」

そこで、陣立ての順序變更。

一番と定まつてゐた坂井右近が、

「これは迷惑至極——」

と、異議を申し立てると、信長は大音聲に、

「黙れツ！ もう一度音を出して見るツ！」

と、睨んだ。

坂井は、全く、重ねて音を出すことが出来なかつた。

元龜元年六月二十八日、午前三時。

戦ひは、徳川、對、朝倉の間に、火蓋が切られた。

姉川の水の深さは、深いところで三尺、淺瀬は二尺か一尺、兵は水煙をあげて、川を越しつ、越されつ、まだ明けきらぬ薄明に、旗差物の紋所も、はつきりとは見えわかぬのに、早くも接戦——白兵戦だ。

朝倉方の、聞えた猛將、眞柄十郎左衛門は、このとき年齢、五十歳に餘つてゐたが、何十人力かの

力量は、すこしも衰へず、長さ五尺三寸といふ、とてつもない大太刀を、ピュウン颯ツと振り廻す、猛な武者ぶり。

「真柄ぞ、こゝに在り！」

と、呼ばはる聲の太さよ。

いま、まさに向ふ岸へ、渡つた徳川兵が、バクリ、ばたばたツと、真柄の大太刀を血塗つて、切り倒される。

第二陣に進んだ坂井部隊、續く第三陣の池田部隊、第四陣の木下部隊は、この時、控ツと関をつくつて、浅井の軍勢目がけて、突貫するのだつた。

(五)

「進め！」

と、家康が叫んだ。

前線が、思ふやうに進まないで、負け嫌ひな本性が、奮然と號令させたのだ。

(あれほど無理に請ひ受けた先陣ではないか！)

朝倉勢の前衛を、突破するのに、かうも際どるやうでは、一番陣の面目が立たぬと、さう思つた家康は、

「突ツ込め、突ツ込め！」

と、自分の馬の鼻づらを、前騎の馬尾へ押しつけて、號令を續けざまに叫んだ。

一向宗一揆を撃滅した際に、實戦の経験は、十二分に積んでゐた。自ら槍をとつて白兵戦の戦場を馳せめぐつた家康は、いまや齡二十九歳——最大級に緊張した肉體から、血氣がほとばしる。

この勇氣が有つたからこそ、徳川は、小國ながらも大國とほとんど對等の交際が出来たのだつた。當時の徳川は、六十萬石の領主でしかなかつた。織田の領土は、二百四十萬石を超えてゐた。

四對一だ。

それで對等に近い交際をつづけ得たといふのは、家康が、いつも柄以上、身代以上の、より重い負擔に耐へたからだ。

つまり家康の勇氣と、覺悟が、その負け嫌ひな性質と融合して、四對一の比率以上に、織・徳同盟の義務に忠實だつたと云へる。

人は、その最も欲するものを得ようとすれば、最も大きな代價を拂はなければなるまい。無代價では、欲しいものが手に這入らぬ。

むろん例外はあらう。しかし原則は、さうである。

家康は、断じて僥倖を願ふ男ではなかつた。あくまで實力によつて、地歩を占めてゆく、出来るだけ多く拂つて、そして支拂つた代價だけのものを得ることに努める。それが、彼の方法だつた。勇將の下に弱卒なし。

しばしば云はれる言葉だが、徳川の場合などは、じつに剋切に當て嵌まる。

いはゆる三河武士は精銳だつた。

本多平八郎忠勝の如きは、その代表者だ。

平八郎は、敵の大剛、真柄十郎左衛門の、獠猛無双と見える働きをながめて、

(あつばれ武者ぶり！ のぞむ相手だ)

と、思つた。

このとき真柄は、

「朝倉には譜代の士、近國無敵の豪の者ぞツ！」

と、喚きながら、大太刀を振り廻してゐた。五尺三寸の刀といへば、全く素晴らしい。

舊記に、

「鏝は車輪の如く、双背に錢を伏する程の大太刀」

と、書かれてある。

「鬼真柄とは、我が事なりツ！」

「本多平八郎忠勝？」

名乗り合つて、闘ひ始めた兩雄は、これぞ龍虎の争ひ、と思はれるくらゐ劇しく雌雄を競ふのであつたが、

(だいぶ刀が、重くなつた！)

真柄は、疲労を感じた。

「いざ組まうツ！」

さう、叫ぶと、

「寄れツ！」

と、平八郎が應じた。

たちまち兩雄は打物すて、組んで馬から墮と落ちた。

(六)

五尺三寸の太刀なら鈍元の幅などは、まるで薙刀ほどあろうし、重量は三貫目を遙か超えて、四貫目にも近からうものを、ブンぶん振り廻して數十輩を斬り付けたといふのだから、疲労は當然だ。それで疲れなかつたら、人間であるまい。だが然し、本多平八郎の方も、得物は一丈ほどの鐵棒だつた。これはまた重さから云へば、大太刀の何層倍かだ。十六貫と號する代物だとすれば、疲労はお互であるが、

「ぐ、ぐうツ、うウ！」

と、眞柄が呻いた。

鎧通しの鈍子尖を、深く刺し込まれたのである。

いまままで、上になつたかと思つた間に、下になり、組み敷かれたと見れば、はね返し、一轉一起。目まぐるしいほど、上下に交替したのが、俄ぜん平八郎は上、十郎左衛門は下と、體勢が決まつて了つたのは、歳の所爲だつたかも知れない。

眞柄は五十餘歳。本多は二十幾歳。

たゞし、その三十の差異が、物を言つたのか、あるひは本多の武藝、力量が、勝つた爲か、ともかくも、

「えいッ！」

と、首を掻き切つて、

「眞柄十郎左を、本多忠勝が討取つたりッ！」

映高と喚はつたのであつた。

「やあ父上は討死か！」

眞柄の長男、十郎三郎直基は、父に劣らぬ豪勇の猛者だつた。

「おのれ父の替ッ！」

と、本多を目掛けて、馳せ寄る。

十郎三郎の刀は、四尺三寸。

父のより一尺短い、それでも稀な大業物だ。

「青木所左衛門が相手するぞッ！」

と、横合から、鎌槍しついで突いてかゝる。

本多は、青木に、この敵は譲つて息を入れる。

「ちえつ烏滸がまし、退りをらうツ？」

と、十郎三郎が叫ぶとき、

「たうッ！」

青木の郎黨が、脇から斬りつける。

「推参ッ！」

と、嗚鳴りさまに、太刀の閃き。

血煙の中で、郎黨の首が、たゞ一なぐりで飛んで了つた。

だが、その死骸を、青木は踏み超えて、手練の槍先、鎌に引ッ掛けて、十郎三郎を、馬から墮と、掛け落す。

ちやうど其頃あひに浅井方の驍將、磯野丹波守は、猛然と織田の軍勢のまん中へ、殺到した。

磯野の兵の鋭鋒は、織田方の第二陣、坂井右近の子、久藏を斃し、第三陣の池田部隊をも切り崩しさらに木下部隊を突破して、つひに十三段の備へを、十一段まで破り進んで、まさに信長の旗本へ、逼らうとした。

しかも磯野隊に續いて、遠藤喜右衛門の兵も、深く突入して來た。

いまや亂戦、白鬨だ。

一たん崩れた諸陣の兵も、

「それ御本陣が危いッ！」

と、敵の挺進隊へ、追撃する。

遠藤喜右衛門は、討取つた敵の首を引ッ提て、單身、徒歩で、

(信長へ近づかう！ 織田兵に紛れ込んで——織田の兵の眞似をして——)

と、思つた。

(七)

遠藤喜右衛門の熊鬚面は、まつたく血染めになつてゐた。

眞ツ向にも、頬さきにも、鼻の突ツ端にさへも、傷を負つてゐた。その傷から流れ出した血と、ぶツたぎつた敵の軀から、ほとばしつた返り血とが、一緒くたになつて、顔一面みたいな塊りに、凝結して、髭にこびりついた。

だから、物に譬へていへば大きな柘榴を叩き割つて、朱の總を附けた様だ。

人相も、面體もあつたものでない。

しかし紛れ込むには、屈強一。

「——やあ此の首を見るッ、此の首を見るッ！」

と、遠藤は、叫びながら、持つた首を高く差し上げて、

「浅井方の勇將、鬼神と聞えた安養寺の首、三郎左衛門の首、討ち取つた。討ち取つたるぞツ！」
同僚の安養寺には、すこし済まぬとは思ひながらも、

(信長を、討つためには！)

誰か近寄るためには、さうでも叫ばずには、恰好がつかない。

遠藤は、安養寺の首だ、首だと喚きながら、敵將の本陣へ、走り込んだ。

(今日こそ運さんぞ！)

一度ならず、二度までも、信長襲撃には、失敗の苦杯を嘗めた彼だつた。最初は、信長が浅井長政と初対面の折の、酒宴の席で、二度目は、國境の柏原、成菩提院で――

遠藤は、信長を刺さうと、決心する前に、鳩毒で毒殺を、目論んで、それも失敗に終つた。

(あの時に、信長を、片附けて置きさへすれば、こんな辛い戦は、闘はずとも宜かつたのに！)
忿怒の齒がみを、噛み鳴らしつゝ、突入したとき、

「な、何者ぞツ？」

と、竹中久作が叫んだ。

久作は、竹中半兵衛重治の弟だ。

遠藤は、

(縮尻つたか！)

と、思つたが、

「安養寺の首だツ！」

さう喚くと、

「おのれは誰ぢやツ？」

曲者ツ、と感じたので、久作は、いきなり腰刀を抜き放つて、

「えいゝツ！」

叫び諸共、斬りつけた。

遠藤も、鬆しさまに、抜き合はせたが、遅かつた。

「呀ッ！」

遠藤は、よろめいた。

さすが大剛の彼も、最前からの亂闘で、おびたゞしく深傷、浅傷を負つてゐたので、もはや體が、思ふやうに動かなかつたし、久作の打撃は鋭かつた。遠藤は、踏み休へようとしたけれども、その利那に目が眩んで、嘔ツと倒れた。

ちやうど其所から、半丁ほども距たつた場所で、

「安養寺三郎左を、生捕つたアリツ！」

と、呼ばはる聲々が響いて。

安養寺もまた、遠藤とひとしく信長を狙つて、こゝ織田の本陣へ、紛れ込んで、そして見露はされて、群がる兵のために、生捕られたのであつた。

反信長聯盟

(一)

お類が、

「館さまは、なぜ、さうしげしげと、都へばかり入らつしやいますの？」

と、訊ねた。

信長は、世嗣、奇妙丸信忠の生母である此の側室の貌を、やゝ少時ながめてから、

「ふ、うふふ！」

と、笑ふ。

「あアら變なお笑ひ様をあそばすこと！」

「變なものか。ウフふ！」

「でも！」

「でも其方の方が、變だもの」

「訝しう御座いますわ！ なにやら始終、そわそわと——前のやうに落着いていらつしやいませぬものを！」

「それは左うよ、その筈だよ。氣になるからな——心が、とかく引かれて、この岐阜へ還つても、以前みたい、尻を落ツつけてはをれんのだ」

「あれ！ ですから伺つてゐるので御座いまする」

「だから返辭をしてゐるではないか」

「若い、さぞお美しい、お娛しみが、お出来なさいましたので、御座いませう？」

「ウふ！」

「まあお匿しあそばさすとも、よろしいでは御座いませぬか？」

「馬鹿め！ 女は此所で、ウンザリするくらゐ食傷してゐる」

「あらお憎らしい！」

「憎らしいのは京都だよ」

「京都の、何女なので御座いますツ？」

「京都は室町だ」

「室町の——お公家様の姫君ででも、いらつしやいまする？」

「馬鹿野郎ツ。相手は男だよ」

「あアら、お若衆なので御座いますか？」

「ちがふ」

「お色稚子さま？」

「將軍だよ、室町の」

「え？」

「色戀沙汰かよ。全く厄介で、劍呑んで、危ツかしくて、目が離されんのだ。打棄つておいたら、なにを仕出かすか解つたものでない。だから、しげしげと上浴して、見張らなくてはならんから、遣りきれん」

信長が、さう云つた通り、京都の將軍、義昭は、いかにして織田を倒さうかといふ陰謀の、元締だつた。

反信長聯盟は、その有力な加盟者である朝倉と、淺井とが、姉川合戦で大打撃を受けたにも拘らず、ますます緊密に、機微に、打倒織田の目的に向つて、活動を續けてゐたし、そして聯盟の機密司令部ともいふべき場所が、すなはち足利將軍の御所だつたのである。

で、信長は、この陰謀への對策の一つとして、將軍の自由を束縛する條約を、こしらへて、それに調印することを、強要した。

「無理にも判を、捺して貰ふのだ」

さう、光秀に言ひつけた。

信長の全權委員は、明智光秀と、朝日山日乘上人だつた。

どんな條約かといふと――

義昭將軍が、諸國へ内書を出す場合には、必ず、信長の添狀を要す。

これが第一條で、以下、五箇條のうちで、一番肝腎な項目でもあつた。

むろん、こんな條約に捺印するのは、將軍としては、堪らなく厭だつたが、

「御判を、どうぞ！」

と、光秀に強請されると、正面に厭とはいへなかつた。

(二)

義昭は、

(自分は將軍では無いのか?)

と、自分の心に訊いて見るのだつた。

(たとひ信長のお蔭で、足利十五代將軍になれたとはいひながら――すでに將軍である以上、武家の主であり、武門の棟梁では無いか)

「のう明智! この條々を、予が守るとすれば、それこそが、いじ絡み封じ込められて、手も足も出なくなる」

「御意の通り。御足も御手も出ませぬ形で」

と、光秀が將軍に答へた。

「それでは困るぞよ!」

「さぞや、お困りで御座りませう!」

「これさ、左様に同じ事を申しても、始まらぬでは無いか」
將軍は、口惜しかつた。

この五ヶ條に従ふかぎり、自分は俘虜同様なのだつた。

彼、義昭の側からいへば、信長の強要は、傍若無人であつた。

だが、彼が將軍たり得たのは、なんら自力に依るのでは無くて、全く他力本願、信長ソツキなので

ある。

どんなに無念でも、表面、拒むことは出来ないから、溢々顔で、轡を捺した。

光秀と、日乗の、二全權は、條約書を持つて、信長のもとへ歸つた。

義昭は他力本願で思ひ出したわけでは無いが、いろんな關係上、信長打倒聯盟の、最有力な構成國である大坂本願寺の勢力を、かうなるとまづ第一に、すがる氣になる。

今度は、内書どころでは無く、將軍自身が、暮夜ひそかに、大坂まで微行して、本願寺を訪れたのである。

門跡の坊官、下間頼廉が、

「これは御唐突に！」

と、驚くと、

「上人に、緊急にお目にかゝつて、重大な御相談をいたしたい」

義昭はさう答へたのであつたがこの秘密會見——すなはち本願寺門跡、顯如上人と、將軍義昭との談合は、大坂の石山と大川を隔てた對岸である福島、野田の城に籠る三好の殘黨に、旗を揚げさせるといふ結果となつた。

もちろん、信長への反旗である。



福島・野田の城は、淀の大川の吐け口で、攻めるには、甚だ困難な地の利で、おまけに程近い石山本願寺の大城廓から、支援される場合、その要害の利用價値は、驚くほど増大される。

この兩城によつて、擧兵した三好黨は、根來、雜賀、湯川その他の奥紀伊衆と呼ばれる雜軍の兵をも加へて、總勢二萬五千くらゐ。

二萬五千といへば、尨大な兵力である。だから福島・野田の兩城には這入りきれない。

遠里小野、住吉、天王寺のほとりにまで、はみ出して、うよ／＼と陣取つてゐた。

烏合の衆には違ひないけれども武器は、借りものながら、精銳だつた。

怎う精銳かといふと、鐵砲が三千挺。

ほかに、大砲さへ揃つてゐた。

これらの火器は、すべてみな石山本願寺の貯蔵にかゝるものだつた。

つまり、名は三好黨でも、その實は本願寺の擧兵といへたのだ。

富強天下に鳴る石山本願寺が、いまや信長に向つて反噬の爪牙を剥きはじめた。

(三)

京都駐屯軍の司令官ともいふべき、明智光秀から、

「大坂河口の福島・野田の兩城に據る三好黨の擧兵」

と、いふ報せの早馬が岐阜に着いた。

信長は、

(本願寺坊主め、尻押しをしてゐるな！)

と、思つた。

姉川で大勝したのは、六月二十八日であつたが、人馬の休まる間もない八月中旬。

「出陣」

さう命令が、下つた時、

「濱松から、御使者到來」

信長が、

「早馬か？」

やはり、早馬の急使だと聞いて、

「早馬ばかりだなア。武田入道の、信玄坊主が、怎うかしたとでも云ふのか？」

察見どほり、武田の分國では動員令が下つたといふ事を、濱松の家康から報せて來たのだつた。

武田はすでに、上杉と和睦してゐた。北條とは親善な間柄だ。動員したからには、徳川領へ侵入するのが目的であることは、いふまでも無かつた。

「御速報次第——御援兵を賜はりたく」
家康の要求は當然だつた。

なぜかなら、武田の弓矢は、天下の恐怖だつた。

信玄の國力は、いまや充實の絶頂にあつた。今川を滅ぼして、駿河を奪ひ、上杉から上州を略取して、その領土は、甲・信・駿・上の四ヶ國に跨り、動員し得る兵力は、四萬にも及んでゐた。

「厄介だよ」

信長は、武田に攻め込まれた場合、徳川を援けなければならぬ相當な兵力を、岐阜に、そして尾張に残して、上洛軍を進めたのだつた。

月の下旬には、淀川を下つて、福島・野田の城へ押し寄せ、大規模な攻城戦を開始した。だが、城兵は、豊富な飛道具で、要害によつて應戦したから、織田の軍勢も攻め悩んだ。むろん鐵砲は、織田自慢の武器だつたから、寄手も盛んに銃撃を加へ、土手を築いて、その蔭から大砲を放つて、城内へ砲火を浴せた。

攻圍戦は、月を越えて、九月の初旬も過ぎた。

すると、十三日の夜、信長の陣營の後方へ向つて、突然、銃撃を猛烈に浴せかけたのは、ほかでもない石山本願寺の、直屬の軍隊であつた。

この發砲こそは、それから十數年間、信長の後半世の、天下統一の大事業に、最も執拗な妨げをした長期戦の、劈頭の火蓋を切つたものだつた。

大坂本願寺の、信長に對する挑戦——これに東西呼應して、長島が動き出した。

長島の本願寺別院の兵は、だしぬけに木曾川を渡つて、尾張の海部郡へ攻め込んで、小木江城を圍んだ。

小木江の城主は、信長の弟、彦七郎信興だつた。

信興は、四番目の弟で、信長より四つ年下の、三十三歳。

不意に襲はれたので、清洲や岐阜へ、後詰めを乞ふ隙がなかつた。寄手の大將、服部左京亮は、積る怨みがあるから、攻撃は猛烈を極めた。

信興は、城を死守して、つひに自害した。

(四)

夏過ぎて、元龜二年も、すでに秋であつた。

志賀の山

越えて見やれば初時雨

ふるき郷べは紅葉しにけり

これは、「建仁歌合」に見える道玄僧正の歌だ。

また「玉葉集」十四に詠み人知らずであるが、

志賀の浦や

時雨てわたる浮雲に

三上の山ぞ半ばかくるゝ

さう、詠じられた秋の志賀の浦に、湖の西を扼して立つ坂本の城は、ちやうど折からの時雨のな

かに、まるで水墨畫のやうに煙つて見えてゐた。

背景は、色美しい錦を織り交ぜた叡山の、急勾配。

前景は、つばまつた湖尻を距てゝ、平野の上に霞む三上山の姿。

常ならば誰しも詩情を、漫ろにそゝられる風景なのであるが、いまは山水の情趣などに目をむける

餘裕など、あらう筈がなかつた。

志賀の浦は、雨のなかで猛烈な銃撃が、敵味方の間に交されてゐた。

敵は目にあまる大軍であつた。

すなはち、浅井長政・朝倉義景叡山の衆徒・本願寺宗徒の聯合軍だ。

時立つ叡山の山脈と、湖水とに挟まれて、平地に乏しい志賀の浦には、あふれるほどの大軍なので

ある。おそらく總勢は、三萬をも越えてゐたらう。

これに對して、味方は、城の外には、一兵も無いのである。

まさしく孤城の奮戦だ。

城の主は、森三左衛門可成。

(俺も今年は四十八歳だ。是非とも、しなければならぬ御奉公は、すでにしたともいへる、平手老の

あとを引受けて、すゐぶん骨の折れる御側役を、無事に務めあげて、その功勞で、この坂本の、大切

な城の城主にまで成ることが出来た。今は最後の御奉公だ！)

敵は、信長の虚を衝いたのだ。

つまり、淀川口の中島に本陣を構へて、信長が、大坂本願寺と三好一黨を相手に、もはや相當、長

期にわたる戦争を繼續してゐるのを、好い機会にその糧道を斷つため、姉川で大敗した腹藏せから、

叡山と、江州の本願寺門徒を語らつて、不意に、こゝ坂本の城を圍んだのであつた。

(一死、分を盡さう！)

森三左衛門は、城を枕に、討死を遂げようと覺悟を定めて、自分の兵の全滅を賭した。

「譜代の君恩に、死を以つて報いる時が來たのだ！我等の英主、信長公の御爲めに、死ぬべき時は今ぞ！死ぬや、死ぬッ！」

と、聲を限りに、叫んだ。そして自ら狭間に立つて、鐵砲を亂射した。

(安心して死ぬることは、何といふ伴ひだらう、俺は妻子を、岐阜に残してゐる。もうこの城に彼等がゐたなら、冥土への道連れに、しなければならなかつた。妻は兎に角、幼い子供らは成長して、君のために働かなくてはならぬのだ。こゝで死ぬなら、これこそ徒死であつたらうに！あゝよかつた！)

長男の、勝藏長可は、十四歳で、姉川に初陣したが、今度は信長の側近に扈從して、大坂に出陣してゐたし、次男の亂丸七歳、三男力丸六歳、四男坊丸五歳、五男仙千代三歳の四人の男子は、その母と共に、岐阜の城下に暮してゐるのだつた。

(五)

坂本城が落ちて、森三左衛門は、城と運命を共にして切腹し、道家清十郎、おなじく助十郎の兄弟も、奮戦して討死をとげ、坂本の城下町は焼かれて、灰になつた、といふ報告が、大坂の中島に對陣中の信長に届いた時、ほんの即座に、

「こゝを引き揚げよう！」

退軍命令が、出た。

本願寺、三好一黨と對峙してゐた織田軍は、いまは前の敵をそのまゝにして、後ろの敵に當らなくてはならなかつた。

信長は、疾風のごとき速さで、全軍を遣して、逢坂山を越えた。

だが、敵は、悉く叡山へ、逃げ上つて、決戦を避けてしまつた。

で、信長は、叡山へ、

「もし、陰謀の加盟から脱退して、我方に應援するに於ては、織田の分國內の山門領は、返してやつてもいい、しかし應援することが出来なければ、せめて中立すべし。もしもこの二箇條を聞き入れず信長の討平事業の妨げを致さば、根本中堂、三王二十一社を、すべて皆、焼き拂ふが怎うだ？」

と、通牒した。

叡山は、しかし、應じなかつた。

浅井・朝倉の軍勢が、一つ穴の貉として、もぐり込んだ叡山だから、
「左様ならば」

と、いふ筈がなかつた。

「きかぬか。きかぬなら山を、干乾しにしろッ！」

さう、信長は嚴命したものだ。

織田軍は、叡山を包圍した。そして、糧道を斷つた。

だが、江北の十箇寺は、大坂本願寺の命令を奉じて、ひそかに湖水を横斷つて、兵糧船を送つた。
船で運ばれた糧食は、比良の山蔭から、叡山にみつがれた。

小さい城を圍むのならば、兵糧攻めも容易いことだが、叡山ほどの大物になると、糧道を斷つといふことは、とても大變な仕事だ。

元龜元年は、封鎖戦のうちに暮れた。

年が、翌けると、長島本願寺の軍事行動は、ますます勢ひを逞しくしてきた。

「長島を叩いて置かんことには、尾張が危くして仕様がないな」と、信長が云つた。

しかし、長島の武力に對する認識が、だいに足りなかつたと見えて、

「權六、行つて來ようではないか」

と、柴田へ、まるで川狩にでも行くみたいに、云つたのである。

長島を甘く見くびり過ぎた信長は、しごく無雜作に、輕兵を率ゐて、自から木曾川の河口へ、出馬したのであつたが、行つてみると考へたやうなものでは無かつた。まったく敵は、豫想外な強さだ。

長島全體の民衆は、

「男たる者は、一足も退くべからず。女たる者は、一言も悔むべからず」

と、いふ信條によつて戦ふのだから、實に獐猛なのである。

だから退治に向いた信長が、あべこべに退治られさうになつた。

「これは不可ん！ 出直さう」

信長は、退却したが、長島勢は、先廻りをして、退路を斷つた。

そこは、右が大川で、左が山の崖だつた。

この難所で、鐵砲の齊射を、頭上の山から浴びせられ、柴田權六までが負傷するといふ苦戦——。

叡山焼打

(一)

「いやハヤ酷い目に逢つたよ！」

信長は、仰山に顔を擧めた。

そして光秀へ、

「権六の奴は、怪我をするし、氏家ト全めは可哀相に、斃びて了つたし、おれの鎧にだつて掠つた、弾丸は、五發や六發では、なかつたからな、謂はゞ、死にツばぐれて戻つたみたいなものさ」と、云つた。

「ほう左までに！ すゐぶんと御危い所を、凌いでおいでなされましたよな」

光秀は、坂本城の焼け跡で、信長と並んで立つてゐた。

「む、河でも海でも湖水でも、およそ水と名の附くものは、なんでも好きな俺がよ、こんどばかりは

あの揖斐川には、手を焼いた。水で手を焼けば、ほんたうに水火の難だよ明智！」

「御戯れを！」

「いや全くだ。なんぼ俺の水馬好きでも、鐵砲玉の降る中では、川泳ぎも出来んし、陸で産まれた生き物は、やはり何と云つても陸を逃げる方が、得手だし、速いよ。だけど厄介なことには、こつちの逃げる一本路が、崖の眞上の山からは、ダアン、だあん、パラパラ射つから、お堪りこぼしもありはせぬ形無しだ」

聞いてゐる光秀は、呆れた。

「これが戦ひ利あらずして退却してきた大將の言葉だらうか？ まるで敗け軍を、娛しんでゐるやうではないか？ 訝しな御方だ！」

近ごろは、だいぶ信長といふ人物が、解つたと思つてゐたのが、かうなると又、變に、こんがらかつて、譯が解らなくなつて了ふ。

「館！ もそつと、御自重あそばされては？」

さう、光秀が云ふと、

「おい、訊かう」

信長の無造作と、光秀の重厚苟くもせぬ態度とは、なんといふ突飛な、兩極的な、反對照であつた

らう。

「は、なに事で御座りませうか？」

「荒ッぽく物事を片附けるのは、自重と云へようかの？」

「なんと仰せらるゝ？」

「明智の頭は、それで宜いのか？」

「輕舉妄動は、館のおんために、拙者は忌みまする」

「どうも廻りくどいな。俺の目的を、まさか知らんことは有るまい？ なんの爲に、俺が斯うして動してゐるかを？」

と、訊かれては明智も、簡明に答へなくてはならないやうな氣がして、

「天下布武」

「だらう？ むろん俺は、輕はずみや、妄動なんぞはせぬけれど、自重は、もう宜い加減、秋山時雨だ。さう自重ばかりしてゐた日には、天下布武どころか、足もとから鳥ばかり、たゞせる。これからもう、荒療治だ」

と、信長が云つた。

「荒療治？ と、仰言いますると？」

「叡山を、本當に焼き拂ふのだ」

「やッ！ では眞實に焼打を？」

光秀は、おぼえず叫んだ。

叡山を焼くといふ言葉が、もし他の人の口から出たのなら、おそらく驚かなかつたであらう。なぜかなら、いかに口では、そんなことを言つたにせよ、それを實行する氣づかひは無いからである。

だが、信長なら焼くと云へば、眞實に焼きかねない。

「なんだ、その面は？」

「館の仰せは、それは叡山への、御威嚇のみと心得まするが——」

(二)

「莫迦いへ、脅かしなものか」

晩秋の風、蕭々と湖面を渡つて來る。

信長は、明智の顔を、ながめ直して、ほゝゑみながら、

「本當に焼くのだよ」

と、云つた。

光秀は、危惧した通りなので、

(どうも困つた事に成つて来た。叡山を焼くなどと——考へても怖ろしいことだ！)

さう思つたから、

「館ッ」

風の中で、聲が顫へる。

だが信長は、ほんの苟且ごとみに、

「伽藍だけでなしに、山ぢうの坊主どもを、寺ぐるみ焼き殺すのだ。さうでもしたら、いくらかは、清々するだらうから」

と、云ひながら、にたにた笑ふ。

「とんでもない事を承はる！」

光秀は、形を改めて主君を、凝つと見つめる。

「明智。とんでもないのは先だよ。山だよ。山法師だよ」

「山法師どもの傍若無人は、今始まつたことでは御座りませぬ。しかしながら中古王朝の、帝王におかせられてさへ、わが心に叶はぬものは、雙六の賽と、鴨川の水と、山法師ぢやと、宣給うたと申し

まする」

「だから捨て、置けと云ふのか？」

「否、お捨て置きなされませとは、申上げぬが、唯、焼くの、殺すのと——」

「光秀。おれも力に叶はなければ、云ひはせぬよ。しかし信長は叡山を、今、焼くことも出来るし、山法師どもを皆殺しに、することも出来るではないか？」

いつしか信長の顔面からは、朗かな微笑が影をひそめてゐた。

光秀が、

「そも叡山を、館は何と思召す？ 王城鎮護の靈域、顯密兼學の大道場でござります。皇武兩門の祈

願所として、勤行不退の地でござります」

信長は、云はせも果てず、

「不敬ぞ、明智！ 皇武兩門とは何だツ？ おそれ多くも 皇室に、武門を併べ稱するのは、僭上ぢやぞ！」

光秀は、意外な衝撃に出會つて、信長の尊皇精神のつよさに、一驚を喫しながらも、理の當然を感じて、

「はッ、皇武とつらねしは光秀の誤ち！ では早速、公武——即ち公家・武門と申し改めまする」

と、頭を下げると、

「敬ひを知れ、敬ひを！」

おツ被せて、

「かう見えても俺はな、禁裏の尊さを心得てゐる、それを知つてゐるからこそ、やんごとない聖旨を奉戴して、天下布武に、乗り出したのだ！」

さう云つてから、

「叡山ごときが、何だツ！」

と、大きく嗚鳴つて、

「宗教の本質を忘れて、兵を蓄へ、私利と私慾を貪るばかりか、魚肉を喰ひ、酒に酔ひ痴れ、清浄なべき山上へ、女を引き上げ、引き摺り込んで、眞ツ晝間から淫戯に耽つてゐる。なにが、王城鎮護だ？ 勤行不退が、チャンちやら可笑しいぞ明智！」

信長は、いつもとは全く別人のやうな、物の言ひ方をするのだつた。

(三)

信長は、功臣であり、慶將である森三左衛門や、辱けない勅使受けの、思ひ出にからまる殊勳の家、道家の嫡男清十郎、次男の助十郎などを討死させた新戦場の、焼跡に立つて、頭上に峙だつ叡山を、仰ぎ見ながら、いつになく眞面目な憤激の言葉を、ともに吐露するのであつた。

(佛教の敵！ 怖るべき佛敵！)

光秀は、さう思はずにはゐられなかつた。

「僧ツ！」

諫めの意志を籠めた鋭い聲が、寥々と荒ぶ風の中で、前よりも一層強く震へた。

「何だ？ その聲は、俺を止めるのか？」

「佛教は、わが國の人文の土臺で御座ります。本朝風俗の基礎となり、母胎となつたのは、即ち佛の教では御座りませうまいか！」

「光秀！ 寝言のあまりみたいなことを言ふぞ。日本の文明に貢献したのは、昔の佛教だ。過去の高僧達のうちには、傑れた人物も居た。だが、今の生臭坊主、糞坊主共が何だツ、謂はば寄生蟲だ。いやもつと悪い！ 國家社會を蝕む白蟻だ。捨り潰し、焼き殺すに、何の遠慮がある？」

「それは、それは、御極論で御座ります。申さば、御暴論であらうかと——」

「明智ツ お許は、妙心寺や、叡山の松禪院やで、坊主の修行までしたといふが、まさか、今日を見

越して、留男になる氣でお經を習つたわけでもあるまい。それともいよくとなつた場合には、山法師共の元締にでもなつて、この信長に双方向心かツ？」

光秀は、信長の眼の光の中に、激しい忿をみた。

と同時に、その聲の奥に、何と言ひやうもない、重さの壓力を感じた。

(返辭をしなければならぬ！)

と、思つたが、この場に適ふやうな返答が、腦裡に浮ばなかつた。

「なぜ啞者の眞似をするのだツ！——坊主であらうと、佛であらうと、信長の中原布武を、妨げる者は、容赦なく、叩きのめし、打ちのめす！ その打倒を、信長の討伐の手を、遮るのかツ？」と、叫んだ。

かう吹鳴られては、光秀は前へも、後へも、動きがとれない。

(館は、山を焼くと仰有る。この次は、自分に焼けと下知なさるに違ひない。あゝ、どうすればよいか？！)

彼、光秀にしても、叡山が、信長にとつての、怖るべき癪であることを、思はないではなかつた。

叡山を、このまゝに打捨つて置く限り、反信長聯盟の連鎖は、何としても打切れない。

と、云つて、信長の意志どほりに従へば、山上の夥しい僧侶、僧兵、寺小姓、寺男の幾千人かを、

七堂伽藍と共に、劫火の焔に焼かなければならない。

叡山を一炬の煙に、化するといふことは、光秀が過ごしてきた経験と、その得た修養とが、許さなかつた。

「まだか、返辭は？」

と、信長が促した。

これまでの光秀は、すゐぶん、役に立つた。戦場の第一線に立たせれば、天晴な闘將だつた。また謀を陣營の中にくぐらせても、立派な参謀だつた。

ことに、京都關係の仕事させると、信長の部將の誰よりも、重寶だつた。それは、光秀の教養が深かつたからである。

だが、この教養の深さが今、彼を逡巡はせた。

(四)

(何をさせても出来るくせに、坊主退治となると、顔の色を、失くなすといふのは——) 訝しな奴だ。

新知識が、充分ありながら、存外、頭の造作に、古臭いところが脱けきらずにゐる。

(この男に一番の疵は、勿體ぶることだ。因襲といふものを、必要以上に有難がるらしい。だが、そんなことで、時勢の新規立て直しが、出来るか?)

信長は、さう思つたので、さう歎鳴つた。

「土臺からの建直しが、お許みにたいに臆病で、出来るか出来ないか、考へて見いッ！」

「は——」

光秀も、臆病だと言はれたのは、生まれて此方、今日が初めてだつた。

「明智、お許は城造りの名人ではないか。俺に口敷をきかせずとも、邪魔ツ氣な古建物のある場所に新規普請が成るか、成らんか知らぬ、お粗末な頭でもないのに、解りさうなものだがな」

信長の語氣が、和げば和ぐほど、光秀は困つてきた。

「仰せの旨は、諒解叶ひまするが——」

「なに、諒解叶ふ? これさ、第一そんな言葉づかひが不可んど。そんな言葉は、古い殻だよ、もう新時代を創出さうとする者は、古臭い殻なんぞ、着てゐては駄目だ」

「館! 仰しやることは能く解りまするが——」

「その、が、が餘計だ。解つたら、さつさと山を焼くが宜い!」

「しかし——」

「まだ云ふか?」

「頑迷無頼な僧兵どもに、膺懲の鐵鎚を、お下しに相成るのは當然、とは存じますが、根本中堂三王二十一社の伽藍を、灰燼に歸せしめることは、なんととしても——」

「えい黙れッ!」

と、信長は、再び歎號を用ひた。

古へからの傳統を、これ見よとばかりに破壊して、叡山を焼き拂ふことにこそ、信長の意圖の重點があつた。

じつさい、叡山の腐敗と、山法師らの破戒亂行とは、「南都多聞院日記」でも明らかだ。

「ひわた葺の大堂本尊は、拜まれず。燈明二三、形の如く、これあるのみ。堂も、舍坊も、一圓はてきれたる體なり。淺猿々僧衆は、亂行不法限りなし。修學廢怠の故かくの如し。一山相巢式なり各々これを語る。諸寺併せて此式なり。悲しむ可し可「悲」

で、信長は、つひに荒療治に着手した。

「山ぢうを焼拂へッ!」

命令一下。

大軍は、犇々と四方から取詰めて、山上さして攻め登る。

これは實に、未曾有の果斷だつた。

(叡山七百年の積悪が、報いられる時だ！)

さう思ふと、信長は、絶大な愉快さを覺えた。

「容赦するなッ！」

と、いふのが軍令だつた。

これ以上の簡單明瞭はない——。さしも廣大な天台宗の大本山、延暦寺も、謂はゆる稻麻、竹藪に押ツ取圍まれた。

山門三千の僧兵は、浅井・朝倉の兵と共に、谷々降々に、支へ防いで闘ふのであつたが、織田軍の銃聲は、猛烈だつた。守りは破れた。

根本中堂は、濛々たる黒煙を吐き始めた。

煙！ 火！ 火！

(五)

「叡山を亡ぼすものは、叡山だ！」

信長は、東坂本の大鳥居の前に、馬を立てゝゐた。そして、この言葉を、口ずさんだ。

これは、信長の口から出た色々な秀句のうちでも、就中すぐれた文句だつたらう。

叡山の大厄難は、たしかに自業自得だ。

もしもさうでなかつたら、佛罰は、立ちどころに彼、信長に當つて、あへて後年の本能寺の變を待たなかつたであらう。

なぜこんな事をいふかといへば、

空を劈いてビューン！

と、凄い唸りとともに、飛んで來た超特大の矢が一筋——それは山門隨一の荒法師といはれた金剛相模が、

(おのれ信長、この一矢で！)

と、切つて放つた強弓の、矢の根の長さ一尺二寸といふ猛矢だ。

これは後に、京都の大佛殿の寶藏に傳はつてゐたと傳説されたくらゐの矢の根だが、信長に佛罰の富らなかつた證據には、信長の體からは外れて、乗つてゐた馬の、太腹をツツブリと刺した。

馬は一矢に倒れた。だが、信長は、大鳥居側の、石の上に立つて、下知を續けた。ところが、その

時、二の矢が来た。

しかしこの第二矢も、踏まへてゐる足の下の大石に、發止と打つかつてしまつた。前には千種越ゑの二つ彈丸——いままた金剛相模の強弓の二矢——いづれも信長の體を狙ひ、はづした。

「根本中堂、三王二十一社を初め奉り、靈佛、靈社、僧坊、教卷一字を残さず、時に雲霞の如く焼き拂はれ、灰燼の地となすこそ哀れなれ、山下の男女老若右往左往に廢忘いたし、取るものも取り敢えず、悉く、徒歩はだしにて、八王寺山へ逃げ上り、社内へ逃げ籠り、諸卒四方より鬨を上げて攻め上る。僧俗、兒童、智者、上人、一々に首を斬り、信長の御目につけ、これは山頭に於いて隠れなき高僧、貴僧、有智の僧と申し、その他、美女、小童、その數を知らず、召捕り、召列ね、御前へ参り、惡僧の儀は是非に及ばざれど、これは、お扶けなされ候へと、聲々に申上候へども、なか／＼御許容なく、一々に首を打ち落され、目もあてられぬ有様なり。數千の屍、算を亂し、哀れなる次第なり。年來の御胸の腫を散ぜられ終はんぬ——」

この時の事を、當時、京都に在住してゐた耶蘇教の宣教師たちは、怎う觀察したか。「信長が叡山の僧徒を憎むことは一日ではない。さきに軍を還したのは、嚴寒のためのみでは無い。兵が不足したからだ。今度は歸國の様を成しつゝ中途より路を轉じ、不意に叡山を圍んだ。信長は



兵を山上に登らしめ、悉く僧徒を殺戮し、全山あだかも僧徒の屠場となつた。信長の命令は周到にして、観音堂、その他の殿堂、寺院のすべてを焼き、猛獸をあさるが如く、兵を洞窟に入れ、逃げかくれる者を捜し出し、みなこれを殺した。上帝が、この大敵に罰を加へたのは、一五七一年、聖ミツセルの祭日であつた」

これは、『日本西教史』からの抜萃だ。

信長は、玉石を俱に焼いた。

憎むとなれば、徹底的に憎んだのであつた。

(六)

この異常な大事件——叡山が焼拂はれたといふ空前な出来事ほど、當時の天下、社會の人心を衝撃したことは無かつたに違ひない。

ほとんど例外なしに、誰もが魂を、震撼させた。

洛西天龍寺の果彦和尚は、

法衰へたり比叡大中堂

歎息す三災上蒼を焦す

陽温む二十四郡の湖水

灰冷かなり三千利道場

天子の願輪日月を懸け

山王權現星霜を經るに

白髮會て斯く有神在

七たび看る東海變じて桑と爲るを

と、その駭魂の情を詠じたのだつた。

末法を歎き悲しんだ者、佛罰を怖れをのゝいた者、信長を呪ひ憎んだ者——それらの者どもが如何に多かつたにせよ、空前の出来事を現前させたといふ事は、空前な人物でなければ到底、爲し得るわけがない。

この時の政策として、信長がやつたやうに、焼き拂ふのが最善であつたか、どうか？

それには疑問もあらうし、いろいろ研究の餘地もあるだらうが、とにかく云ひうるのは、信長の叡山焼打は、千古の壯舉だといふことだ。すでに云つたとほり、

「朕の心に叶はぬものは——山法師」

と、おそれおほくも、白河法皇さへが宣給うたのである。叡山の僧徒が「日吉の神輿」を擔いで、山を下り、猛々しく強訴、咆哮する時には、勿體なくも禁裡すら、彼等の勝手放題を制すべき手段をお持ちにならなかつた。また、清盛のやうな剛腹の覇者でもが、京都から福原へ都を遷しまゐらせた理由の一つは、叡山の僧兵を避けるためだつたといふ。

ゆらい、叡山の大勢力は、他からは全く、一指も染めがたい、嚴然たる治外法権であつたのだ。

だが信長は、天下布武と海内の統一を志ざした。で信長に云はせれば、

「統一政權の下に、治外法権は許せない！」

いはんや、叡山の如く強力な厄介物は、これを根こそぎ、覆滅するほか、方法が無いと、さう、考へた。

そして、考へた儘に、實行した。

因襲久しく、積り積つた弊害を除き去らうとすれば、餘程の荒療治が必要なことは、いふまでもないが、さうであると、考へることは容易く出来ても、いざ實行となると、なか／＼爲し得るものではない。

若い頃から「こん／＼馬」と綽名されて、その常識の存在を疑はれ、ほとんど半狂氣あつかひにされたくらの信長——彼にして初めて初めて出来ることだつたらう。

極端なる無軌道——とてつもない無鐵砲——斷ずることの速さが電光、石火も管ならぬ信長なればこそ！

成し得た焼打であつた。

ほんたうに得意満腹で、岐阜へ戻ると、待つてゐた最愛の濃姫夫人へ、

「坊主を焼き殺して、坊主に賞められて来たよ！」

と、信長は云つたものだ。

まだ姥櫻とは謂へないほど嬌美しい夫人が、

「まあ何で御座いますつて？」

額をひそめると、

「耶蘇坊主に、えらく讚美されたぞ」

信長は、ほがらかに笑つた。

耶蘇教と信長

260

「おれは切支丹バテレンを、信じようとは思はないけれど、たいがいの佛教坊主よりも増だよ」
すくなくとも耶蘇坊主は、これを保護してやつても宜いと、さう信長は思つてゐた。

「第一、心掛けが殊勝だ。第二には、新知識だ。西洋から萬里の海を渡つてきたもの、世界を觀てゐる。おれたちの全で知らぬことを、彼等は知つてゐるし、珍しい物、得がたい物を彼等は持つて来る。それだけでも、徳を生やして腐つてゐる佛坊主に比べて、どれほど宜いか、格別考へなくても解る。叡山だけは、しごく小清淨と退治してくれたが、まだまだ本願寺といふ巨物が、ガツチリとさばつてゐる。

だから、坊主征伐は、これからが本舞臺だ、といふのでつた。

耶蘇教の宣教師たちは、叡山を「大敵」と呼んで、信長に焼打られたのを、天に在します唯一神が

罰を加へたのだと評したが、彼等の宗教は、今や漸く近畿においても、社會的な一つの要素となりかけてゐたし、すでに九州では、隱然一大勢力となるべき根を、民衆の心に植ゑつけたのであつた。

これは、耶蘇教が初めて日本に這入つて以來、どれほども經たないうちに、その宣教師たちの努力が、あがなひ得た状態だつた。

とすれば、かなり速かな傳道力と、これを受け入れた其頃の民衆の、心的状態が、どんなものであつたらうかが、想像される。

つまり、古いものは、頹廢し、墮落して、新しいものが、求められてゐたのだ。

日本の民心は、無意識的に、舊日本からの脱却と、新しき日本の建設とを、要望してゐた、と言へるし、そこにこそ信長の存在意義があつた。

耶蘇教が、わが國で最初に足場を作つたのは、豊後の府内で、大友氏の信仰を得たからだ。

ついで、平戸と、博多に傳播した。

やがて長崎にも大きな根據が、出來た。

わづか百戸くらゐの淋しい漁港だつた長崎が、數年後には、人口三萬に近い都市となつたといふのは、全く、耶蘇教と貿易との恩澤であつた。

九州から、耶蘇教は、中國の山口と、近畿の堺とへ、その傳道を伸ばした。そして堺まで來れば、

261

京都はすぐだ。

永祿十一年、信長が足利公方を擁して上洛した頃は、上方一帯に、相當な数の信徒を有する耶蘇教だつたのである。

信長に初めて謁した宣教師は、フロエだ。

公方義昭と艱難を共にした和田惟政が、自分の勳功に代へて、耶蘇教に對して松永久秀が發布した追放令を、取消して頂きたい、と願ひでた時、

『よろしい。取消して遣らう』

と、信長が答へた。

義昭は、耶蘇といふと身顛ひの出るほど嫌ひであつたが、信長にさう言はれては、なんとも仕様が無かつた。

フロエに會つて、いろんな話を聞いてみると、

(ぼんやり想つてゐたことゝ、びつたり合ふ)

信長は、さう思つた。

(貿易の案内者だ、新知識の輸入者だ、日本の宗教界に瀾漫する弊害を、打破するには、この耶蘇教に目をかけてやることも、たしかに一法だ！)

利用してやれ、と考へたのだ。

(二)

これは叡山焼打よりも何年か前の話だが、フロエは、信長から京都在住、布教自由の免許を得たので、稍ホツとした。しかし困つたことには、朝山日乗といふ有力な反對者が、しきりに耶蘇教排斥運動をして、朝廷のお力に頼つてまでも、宣教師を京都から追放しようとする目論だつた。

日乗が、なぜ有力であつたかといふと、この僧は、京都における信長の顧問だつた。また用人でもあつた。つまり、朝廷および將軍家に對する、信長の交渉委員だ。

たとへば、信長が、將軍義昭の密書濫發を封じた條約文書にも、明智光秀と名を並べてゐる。

備後における一城の主だつた朝山次郎左衛門の弟であつたが、出家して日蓮宗の僧侶となつた日乗は、和漢の文學にも通じてゐて、禁裏の故實に詳しく、堂上方や寺社方の色んな公事に巧者だつたので、その材能が、信長に認められた。

で、フロエは信長が岐阜へ歸ると聞いて、挨拶に行くと、その場に日乗が居合はせた。

「ふゝ、これは面白〜！」

と、信長は微笑して、

(ちやうど宜い、ふたりに討論させて見よう)

さう思つたので、

「のう、フロエ、佛教坊主は、なぜ御身らを憎むのだらう？」

と、訊ねた。

「おゝわが尊敬するミノ王よ！」

フロエは、信長を、いつもミノ王と呼んでゐた。ミノ王は、美濃王である。

當時、耶蘇教の宣教師たちは皆、禁裏をミカドと、崇稱したし將軍を「クボオ」(公方)と呼び、信長に對しては「ミノ王」の呼稱を用ゐた。

要するに彼等の目に映する信長の大勢力は、彼等をして、王と、云はせたのだ。

——「美濃公」や「岐阜公」では足りないと考えたに違ひなかつた。

「それは吾等が、佛教の宗旨の、甚だしき虚妄を、あからさまに指摘し、僧侶らの行狀の不正を攻撃するからでございます」

「フロエ。お身らは、日本の神や佛を、拜むか怎うぢや？」

信長が重ねて訊ねると、

「いゝえ、拜みませぬ。吾等は、たゞ天地萬物の創造者たる唯一神を、拜するのみでございます」

フロエは、さう答へた。

すると信長が、日乗を顧みて、

「おい、何ぞ云ふことは無いか？」

と、促したので、日乗は、フロエに向つて、

「お身たちは日本の神佛を、輕んずるが、しからはお身らが謂ふところの神とは、そも何ぞや？ 何處に在るか？」

さう、質問すると、

「吾等の神は、在らざる所なく、存せずといふ所なし。絶對にして完全、同時に無限にして永久なるもの、これ即ち吾等のいふ神なのです」

と、フロエが答へた。

「えい何を世迷ひ言！ それこそ虚妄ぢや」

日乗が、むつと腹立たしさを、顔に現した時、

「君、願はくば語られよ。君の信ずる人類および萬象の創造者は、誰か？」

とフロエが訊ねた。

「存せぬツ、左様なことは」

日乗は、吐き棄てるやうに、云つたのであつた。

(三)

「フロエに訊ねるが」

と、信長は言葉を挟んで、

「切支丹の神も、善を賞し、悪を罰するかのう？」

フロエが答へて、

「勿論で御座います。たゞし神の賞罰には、現在すなはち、生存中に受けるものと、未來、すなはち死後に受けるものと、二通り御座います。人の靈魂は、不滅、不朽なるがゆゑに、さうなので御座います」

と、云つた。

日乗は、あざ笑つて、

「ふツふツ、不朽、不滅の靈魂などと、片腹痛し。フロエとやら、そも怎んなものぢや靈魂なるもの

は？ 人に有るなら、お身にも持ち合はせがあらう。見たいものださあ見せて貰はう」

「上人！」

フロエは、敬虔な面持で、

「人の靈魂と申すものは、無質、無色で御座います。なんとなれば形而上のものであるからで御座います。肉眼をもつて、形なり色彩なりを、見得るもの、これ形而下、しからざるものは、これ即ち形而上——」

「ちえゝ黙れツ！」

と、日乗は、俄然いきどほりを激發して、

「人を愚にする虚妄の識語、いま一度口走つて見よツ！」

哮り立つたが、フロエは、

「識語とは情なき御言葉ぞ！ おゝ靈魂を信ぜぬ者は、呪はるべし！」

目を瞑つて、しばし黙禱する。

日乗の忿が、ますます募つて、

「むゝ然らば信じさせて呉れツ！ わしが今、汝の細頸を胸から斬り離すによつて、死後の靈魂を示せるものなら、示して見よツ！」

さう、叫ぶが早い、座を起つて、入側に置いてある和田惟政の佩刀を目掛けて、走り寄つた。おどかしでは無くて、本當に一刀兩斷に、この宣教師を斬つて捨てる氣だつたのである。

「日乗ッ！」

と、信長が叫んだ。

和田が走つて行つて、後ろさまに抱き止めた。日乗の手には、すでに刀が把られてゐた。抜かうとするのを、和田は支へて、その刀を、日乗から奪つた時、

「逆上したのかッ、痴氣坊主めッ！」

と、信長の叱咤が響いた。

だが、日乗はまったく心底から取り逆せたと見えて、猛然と和田へ、しがみ附いて、奪はれた刀を奪ひ返さうとした。前身が武士だから、この上人、なかなか腕ツぶしも逞しい。和田は持てあました。たちまち刀が、日乗の手に戻つた。

「猿ッ！」

と、信長が呼ばはつた。

木下藤吉郎が、聲に應じて、躍りかゝる。

「えいッ！」

足を攫つたのである。

攫はれた日乗が、噓ツと倒れる。折り重なつて、和田もでんぐり返る。藤吉郎の足拂ひは、餘勢を和田へも及ぼしたのだ。

「そろれ、刀をツ！ 奪らんことには危いぞ！」

信長は、藤吉郎へ聲をかけた。

云はれるまでもなく、奪り上げようとしたのであるが、日乗は、根かぎり柄と鞘とを、両手で握り締めてゐる。倒れながらも、刀を放さない。

(剛情な坊主だな！)

腹が立つよりも、信長は可笑しくなつた。

(四)

可笑しくなつて、こみ上げて来る笑ひ聲。

それを抑へるやうな信長ではない。

「ぶツぶ、はツはツは！」

しかし入側ではそれどころでなかつた。

「これさ上人ッ、お放し！」

「えい放すものか、き、き、木下ッ！」

大力の日乗、たちまち撥ね返して、藤吉郎の上に馬乗りになる。両手は柄と鞘を、依然しつかり握んでゐるのだから、撥ね返すにも足藝だ。猿面と一緒に、和田も足絡みを喰らつて、ステン、ドツと轉ぶ。だが、こゝで刀を抜かせては一大事と思ふと、懸命、夢中、たぐり附いて、

「く、く、狂はれたか日乗ッ、御前ぞ、御前ぞ、館の——」

「御前もお前もあるものかッ、わが日の本の國の爲、邪教の賣僧を叩ツきるのだ！ えい放せ放さぬかッ？」

「な、な、なにを世迷ひ言ッ、放せば此方だ、刀を放せッ！」

「おのれ放せ、手を放せッ！」

「刀を放せッ！」

二人と一人、上になり、下になるが鼻が附かない。藤吉郎はつひに、

「坊主ッ！」

と、叫んだし、日乗もまた、

「猿ッ！」

と、喚く。

「わはッはッ、愕いたな、わッはッはッ」

無闇と大きな笑ひ聲に、格闘最中の日乗さへも、ハツと愕いた時、おぼえず緩む力、得たりと奪ふ引ッたくり——猿面は刀を抱へて、のけ反り倒れて、

「あゝ骨が折れたッ！」

と、歎聲を張り上げた。

最前から眼を、碧くしたり白くしたりして、執拗を極めた日乗の格闘を見まもつてゐたフロエは、この時初めて、

「おゝ神は正義の味方なり！」

と、口走る。

信長は、和田と取ッ組んでゐる日乗へ、

「もう澤山だ。止めい！ その執ッこさに免じて、無禮の段は赦して遣はす」

さう云つたので、

(やあ、案外！)

張りといふものが俄然、抜けて了ふ。

日乗と雖も、すくなからず莫迦らしさを感じた。

「和田！」

「なに？」

「罷めよう！」

「お止めか？」

「御前ぢや」

「御前は初めからぢや！」

和田も日乗も、伸びさうに疲労を感じた。全く、ひよんな機みから、馬鹿力を押し出した後の馬鹿々々しさ、それでも和田は、木下と共に、抜刀を制した手柄は勿論だから、どんなに疲れても、また笑はれても、埋め合はせは附くけれど、引ツ込みが何としても附きかねるのは日乗だ。

（あゝ、莫迦を見た！）

だが考へてみると、自分も随分無茶をやつたものだ、さうも思はれるのだつた。

（大きく、お笑ひに成つたから宜いやうなもの、あの時、もし館が、無禮者ツ——と赫ツと御立腹になつたら？ わしの首は飛んでゐたかも知れない！）

その時、藤吉郎が、提げ紐で、刀の柄を括りながら、
「命には、かけ替へが御座らんぞよ、日乗殿！」

(五)

日乗は、しかし諦めきれなかつた。

（朝廷のお力に、おすがりするほか無い）

信長の岐阜へ歸るのを待つて、切支丹放逐令を、復活させようと考へた。

まもなく信長は、京都を去つた。

日乗の、耶蘇教排斥運動は、目論見どほり、禁裏御所にまで及んだ。

「どうも困つた事になつた！」

と、フロエは太息を吐いた。

形勢は、日に増し悪くなる。宣教師たちと、その擁護者である和田惟政一派の耳へは、悲觀材料ばかりが聞えて来る。

「間違つてはをれませぬぞ」

と、和田が云つた。

「なんと致すべきでせう？」

フロエの不安は云ふまでも無かつた。

「信長公に訴へ申す！」

「おゝギフォオへ？」

ギフォオは、岐阜だ。

ポルトガルの宣教師たちは、岐阜を、ギフォオと發音したものである。

「左様。——師父よ、あなた御自身、岐阜表へ、おいでなされませ」

「あゝ、わたくしが、ギフォオまで行つて、直接に、ミノ王に？」

「はい。それに限りますぞ」

和田惟政は、高山飛騨守の兄だ。そして飛騨守の嫡男が即ち『日本西教史』に特筆された高山右近でもつとも熱心な切支丹信者だ。

この和田は、江州中郡矢島の城主で、さきに足利義昭が、まだ僧形で覺愛と云つてゐた時、最初に頼つたのが、和田の城だつたことは、前に述べたとほりだ。だから足利將軍家再興の殊勲者の一人なのであるが、今や心機一轉して、將軍家などは怎うならうと構はん。唯切支丹さへ擴まればいゝ。

(師父 おん身に、祝福あれ！)

と、希ふのみだ。

「一時も早く、岐阜へお越しなされて、織田館にお訴へになることこそ、唯一無二の、御手段と存する」

さう、和田が云つた時、

「ありがたう！」

フロエは、歡喜と懸念とが交り合ふ面貌で、

「しかし、突然まゐつて、王に謁することが出来ませうか？ 王は謁見をお許し下さるでせうか？」

と、訊ねた。

「いや、その御心配なら御無用で御座る。織田館は、じつに御聰明ぢや」

「でも私、不安なのです」

「否々、館は喜んで御引見なさらう」

「けれども私、ギフォオには一人も知り人ごさいません。手づるが無い、大變に不安です」

「おゝ、それほどお氣掛りならば拙者が、御紹介の手紙を認めて、差上げませう」

「紹介状！ ありがたう！」

「一通は柴田殿に、一通は佐久間殿に、もう一通は、木下殿に宛てて書きませうぞ」
和田は三通の紹介状を書いて、フロエに渡した。

(ほんたうに有難い！)

と、フロエは欣喜雀躍。

さつそく京都を發つて、岐阜へ旅立つたのである。

むろん彼の顔に映する信長は、中原の實權者だった。

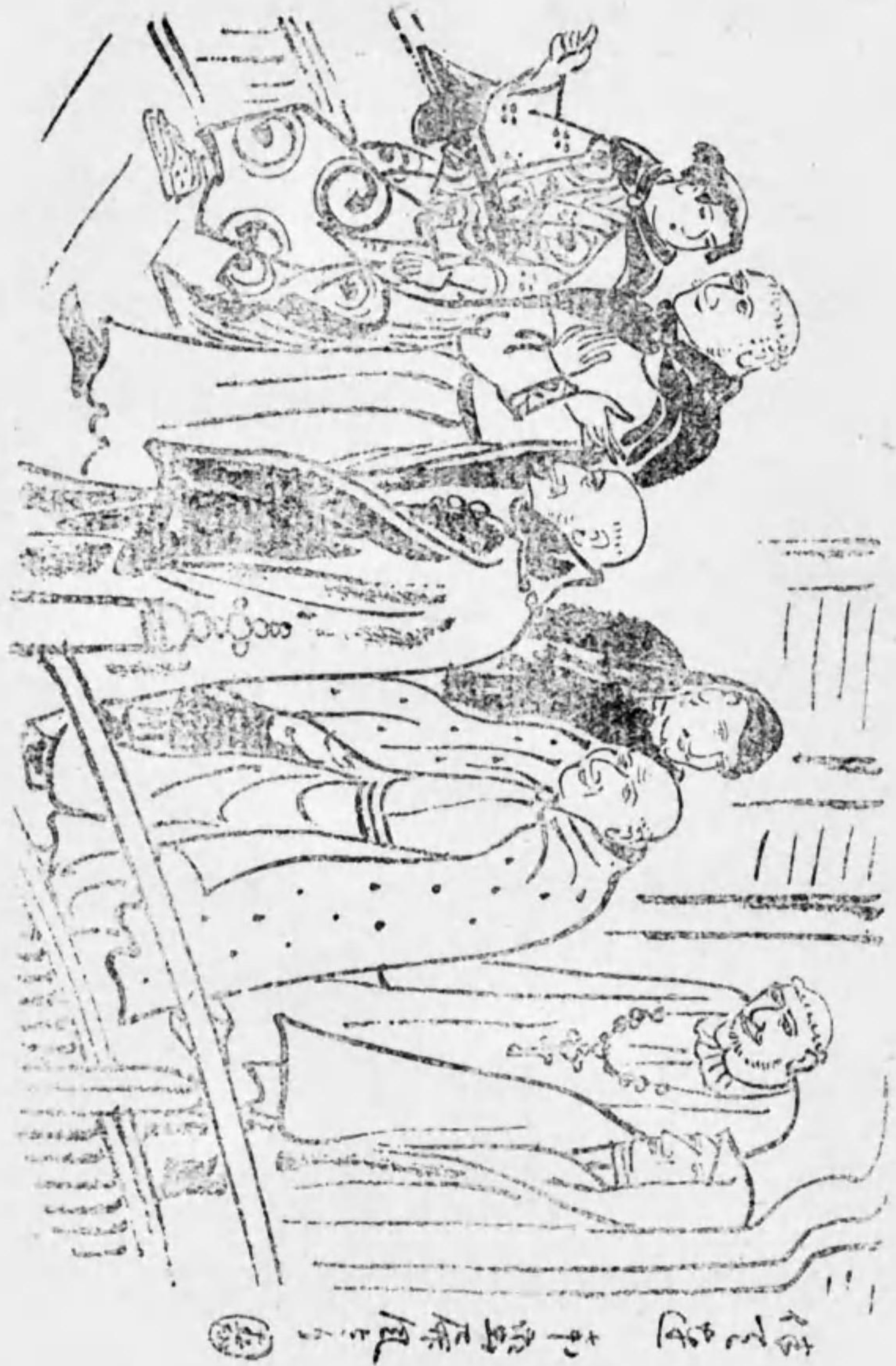
信長の保護の下に、立つことが出来さへすれば、どんな反対も、排斥も、怖るゝに足らぬと、さう思ふと、心が明るくなるのであった。

(六)

フロエの岐阜行は、どんな具合であつたか。

それは、描寫するよりも、フロエ自身に語らせた方が、はるかに適當だ。

「私たちは、ギフォオ(岐阜)の町に着いた。ギフォオの城下町の、民衆の人口は、定住者は案外すくないやうだ。およそ一萬以上は、どれほど出まいと思はれる町屋の戸數だ。しかし此處に集まつて來



る人の数は、全く夥しい。私たちは、ワダ殿の指定した宿に着いたが、人の出入の騒がしいことは、さながら、パビロンの混雑さに等しく、國々の商人が、鹽とか、布とか、その他いろいろの商品を、馬に付けて來集し、家の中は雑沓して、ほとんど何も聞えないほどだ。人々はあるひは賭博し、あるひは食し、或は賣買し、或は荷を造り、または荷物を解きほぐす者が、夜も晝も絶え間がない。まさか晝夜のべつに働いてゐた譯でもあるまいが、おそらく此時は、軍需品の大量發着でもあつたと見える。

だが、岐阜の市民人口が意外に少なくて、一萬人内外だらうといつたのは、たしかに正確な觀察だつたに違ひない。

城下町の特質として、町人の人口よりも、武士の人口の方が、多いのは、あへて岐阜のみではなかつた。

フロエは、つゞけて云ふ。

「紹介狀の宛て先の、キノオシタ殿（木下藤吉郎）はオワリ國へ赴いて不在。サクマ殿（佐久間右衛門）も、シバタ殿（柴田權六）も、まだ出張先から歸らなかつたので、王の前で私たちに庇護を與へる人は、一人もない。で、二日間、宿で待つた」

「サクマ殿と、シバタ殿が歸つた。私は、まづ、サクマ殿を訪問した。彼は、私を好遇して、私の來

たことをすぐ王に傳へると云つて呉れた。私はロレンツ（修道士）と共に、こゝからシバタ殿の家へ到つたが、彼は、ワダ殿の友人であつたから、大いに歡待して、まだ午餐前だと聞いて、直に食ひ切れぬほど食べさせた」

よほど御馳走したものらしい。

「私が、都を發つ時、ニチジョオ上人および其の率ゐる異教徒は、ミノ王は、私がギフォオに行けば、きつと縛つて、殺すに違ひないなどと、云ひ觸らしたので、この風説は、すぐさま、サカイとアマガサキ地方に傳はつて、キリシタンの不幸は此の事だと、信徒たちは悲歎した。だが然し——」

フロエは、さらに續けて、

「ミノ王は、シバタ殿およびサクマ殿から、私の到着を聞いて、大層喜んだのである。王は、宣教師は外國人なるが故に、予は同情し、これを庇護し、都より追放せしむべからずと云ひ、音楽を聞き終ると、立つて室外に出たのであつた」

「私が、ポルトガルおよび印度から日本にいたるまで、今日までに見たるすべての宮殿、家屋のうちで、このやうに精巧、そして斯くのごとく美麗、且つ清淨なる建物は、疑ひもなく絶無だ」

フロエは、稻葉山の麓の、千疊臺の屋形のことを、いつてゐるのである。

「この宮殿は、數年前、武力に依つて占領した當ミノ國の、主要なる城の建つてゐる甚だ高い山の麓

にある。外部は、極めて長い石塀が繞らされ、石の大きさは驚くべく、これを結合するに少しも石灰を用ひてゐない」

築壘の技巧に、まづ注意を拂つてゐるのは、面白う。

(七)

「石塀の内部の地所は」

と、フロエは云ふ、

「ゴアのサバヨの地所の、一倍半以上もあつて、入口には、儀式および祝祭に用ひる劇場のやうな、宏大な家屋がある、この地所の兩側に、大きな樹木が二本立つてゐて、影をつくつてゐる。長い石段を登ると、廣さがゴアのサバヨの廣間よりも、一際大きい廣間に這入る。その梁は、この山で伐つた一本の木から取られた。非常に長い木材だ。この室は、建物の第一階で、望臺と縁側があつて、そこから町の一部が見晴らされる」

ゴアのサバヨといふのは、もとゴアの君主の宮殿であつたのが、その頃はポルトガルの印度總督官邸になつてゐたのであつた。フロエは、そのゴアの建物と、岐阜の千疊臺の館とを比較してゐるので

ある。

「私の驚いたのは、この廣間から奥の構造であつた。内部の諸室はまるでクレタ迷宮だ。實に巧妙な工夫で造られてゐて、あらうとも思はれない場所、意外にも、ザシキ（座敷）と稱せられる美麗な極めた室がある。そして、その奥に、特定の目的をもつ室がついてゐる。第一階には、十五乃至二十のザシキがある」

フロエは、信長から案内されて、建物の内部を觀て廻つたのである。

信長は、

「ヨオロツパヤ、印度で、お身が觀たものと比べると、小さいかも知れんけれど、まあ折角、來たのだから、觀てもらはう」

さう云つて、連れて廻つた。

「ビヨオプといふのは、黄金をもつて飾つた板戸だが、その織金と、釘は、みな純金を用ひてゐた。ザシキのぐるりは、この第一階と同じ平面の縁側になつてゐて、甚だ良い木材が用ひられてゐた。この板の光澤は、じつに美事で、そのまゝ鏡の用をなすことが出来る。縁の壁は、日本及び支那の、古い歴史を移したもので、はなはだ美しい羽目板であつた。この縁の外に、五つか六つの庭園がある。庭の池の底は、小さい石や雪のやうに白い砂であつた。各種の魚が、多數泳いでゐて、水中の天然石

には、いろ／＼の花弁ならびに香氣の高い草が生えてゐた。この建物の背後の山からは、きはめて好ましい水流が、流れ出てゐる、これを管で分送し、あるひは噴水にしたり、あるひは手を洗ふに用ひたり、また他の場所では、宮殿の諸雑用にも當てたり、或は飲料水にも用ゐられてゐるのだつた」

フロエの觀察は、なか／＼行き届いてゐたやうだ。

「宮殿の第二階は、王妃の休憩室その他の諸室と、侍女の部屋々々がある。そして下の第一階よりも一層、華やかで、ザシキは、金襴の布を張り、縁および望臺を備へてゐることは、第一階と同様で、町の一部と美しい山を見ることが出来る。山には日本に於いて期待し得べき小鳥の音楽、および鳥類の美が、ことごとく具はつてゐる」

「第三階には、至極閑靜な所に「茶」のザシキがあつて、その巧妙、完備さは、とても私の能力では云ひ現はせない。私はかつて、このやうな完全さを、見たことが無い。第三階および第四階の望臺ならびに縁から、町を見下した景色は、じつに絶景だ。町には、高貴なる武士、および重だつた人々の住む家が、立ち並んでゐた。宮殿と、商人の住む町との、中間はすべて此等の邸宅であつた」

(八)

おそらく誰よりもさきに、西洋から舶來した陣笠——むろん南蠻鐵、即ち鋼鐵製の陣笠を被つたのは、信長であつたらう。織田の銃砲隊が、當代無比の精銳であつたのは、信長が新式武器を、他に先んじて、價を惜しまずに輸入したからであつた。

信長は新しいもの好きであつた。

つまり急進主義であつた。ハイカラであつた。彼はテーブルに向ひ、椅子に掛けて、ガラス製のコップで、葡萄酒を飲んだ。

しかし、西洋流を模した信長は、西洋人の目には格別、注意をひかなかつたものらしい。

ヨオロツバの異人にとつては、やはり日本流の信長が深く印象した。

フロエは云ふ。

「私は、ミノで一番おどろいたのは、この王に對する臣下の恐怖と、速かに奉仕することであつた。もし王が、手をもつて、去れと示せば、人々は、突如として世界の破壊に接したかのやうに、相競うて退き、クボオ様の最も親しめる武士で、かつまた都に於いては、大なる權勢のある者といへども、この王の面前に出ては、手および顔を地につけ、一人も見上ぐる者が無い。この王の宮廷に於いて、何らかの所用ある者は、王が山上の城から下つて、山下の宮殿に来るを待ち、或はその途中で話し、何人も王の許可なくしては、物を云ふことが出来ない」

このフロエの言葉は、その頃、豊後の府内で、布教に従事してゐた宣教師ベルシヨオル・デ・フィゲレンドに送つた手紙のうちに書かれた文句だ。それは「耶蘇會士日本通信」下巻に載つてゐる。岐阜の有様や、信長の千疊臺の、居館の、四階建の構造や、生活の一端などが、きはめて生々と窺はれる貴重な文献は、これだ。

「その後、一三日過ぎると、王の寵臣であるキノオシタ殿が、オワリ國から歸つた。私はワダ殿からの紹介状を、持つてゐたので、ロレンツと一緒に、それを携へて、訪問した。キノオシタ殿は大層、もてなして呉れて、午餐を共にし私たちの旅館の主人に宛て、私たちを厚く遇するやうに手紙を書いて、もし必要なものがあらば何でもいつてよこせ、直ぐに届けるといひ、且つ私の満足するやうに王の前をよろしくやつて呉れると云つたものである」

如才のない木下の風貌が、躍如としてゐる。

「翌朝、降雨甚だし、ナカガワ・タチロザエモン（中川八郎左衛門重政）から二回も使者が来て、城では私たちを待つてゐると告げた。やがて城からも二回、使者が見えて、王はもはや食事を終はられたが、シバタ殿と共に来るがいゝ、と云ふ事であつた。山は、甚だ高く、城の入口には、胸壁があつて青年の武士十五人または二十人が、晝夜絶えず、これを衛つてゐる。城の入口には二つ三つの大きなザシキがあつて、王の領國の重だつた大身たちの、子息である少年の齡十二乃至十五くらゐなもの

が、およそ百人そこゐるのだつた。王はこれを、外の使に用ひ、このザシキから内は、多くの侍女を用ひてゐた。城からはミノおよびオワリ二國の大部分が見えた。すべて平野であつた。その縁に面して内部に、甚だ美麗なザシキがある。ピョオブは、悉く金であつた。王は、西洋や印度に、これに似た城のある山があるかと、さう私に訊ねた。それから二時間半乃至三時間ほど談話がつゞいたのだつた」

(九)

永祿の末年から、元龜の初年にかけて、フロエは信長の保護の下に、京都と近畿地方に傳道するこゝとが出来た。ウルガンが豊後から上方へのぼつたのは、元龜元年だ。伊太利人オルガンチノが、即ち此のウルガンだ。

ウルガンが岐阜へ来て、信長に謁した時、贈呈した進物は七種の珍品だつた。

まづ第一が、七十五里を一目に見る遠眼鏡である。

第二は、芥子粒を、まるで鶏卵の如く見せる近眼鏡だ。

第三は、猛虎の皮五十張と、長さ十五間に及ぶ猩々緋の巻物。

第四は、四十五丈四方當辭なき鐵炮。といふのだが、これは怎んなのか解釋に苦しむ難物ではある。しかし當ことも無く良い鐵砲——當時としては最精銳な火器であつたに違ひない。

第五は、伽羅百斤。——西洋の香料だつたらう、してみれば、これもまた得がたい珍品と云ふべきであつた。

第六は、八疊釣の蚊帳で、たゞめば僅か一寸八分の手箱に納まる。

第七は、コンタツといふ四十二粒の珠數で、紫金づくりの貴重品四十二箇國を表したもので、以上いづれも舶來の珍奇な品に相違ないから。

「こりあ佳い。氣に入つた」

信長は、十分に満足して、

「佛教坊主は、遣らすのふん奪りで、貰ふことばかり考へてゐる」

菅谷九郎衛門に命じて、

「宣教師の爲に、寺を造つてやれ」

と、云つた。

京都の四條坊門に、敷地をトして、これが耶蘇教寺院建築の場所として寄附された。

北山から大石を引き出して、石垣が築かれ、純粹に異國風な伽藍、すなはち教會堂が、建立され

たのである。

これが出來あがると、永祿寺と命名された。といふのは畢竟、永祿年間に、布教の自由を信長から許されたことを、記念する意味であつたらう。

ところが、この名稱に對して、佛敎側から抗議が出て、それが朝廷を動かした。で、朝命によつて永祿寺の名は、南禪寺と改められた。

「名前なんぞ、南禪寺でもポルトガル寺でも、構ふものか」

さう云つて微笑した信長は、宣教師からの御禮に、大地球儀が岐阜へ届いた時、

「や、これは素敵だ！」

と、大歡喜——相好を崩したのである。

よほど氣に叶つたものと見えて、閑さへあれば、この地球儀を愛玩して、

(これ一つ持つて來て呉れただけでも、庇護つてやる値打はある)

と、思つた。

外國、世界——といふものが、大きな關心の對象になつた。つまり、海外を環境とした日本が、信長の意識を裏づけたのであつた。

叡山の燒打は、耶蘇教の宣教師たちを、狂喜させた。

(ミノ王は、やがて我々の宗教に、歸依されるであらう)

彼等、パレンたちは、期待した。

しかし信長は、彼等の神の信者には成らなかつた。彼等には信長の心理が解らなかつた。

叡山を焼いて佛敵とはなつても、信長の排佛は、佛そのものではなくて、佛寺と僧侶の擁する俗権を、排撃したのだつた。

三方原の激戦

武田信玄は、竟に踵を擧げた。

さながら巨大な猛獸が、動き出したやうに、西へ向つて動き出したのだ。

「大軍を提げて、上洛ありたし」

將軍義昭は、たびたび西上を促した。

松永久秀からも、しきりに誘ひが來た。

「佛敵信長を、今打倒せずば」

と、大坂本願寺からも檄が飛んだ。

長島別院も、挟み撃ちを提案した。

一向宗門徒は、石山や長島の根據が、叡山の二の舞の、慘禍を蒙ることを、慄然として、怖れたの

である。

すでに敗残の朝倉、浅井は、滅亡の瀬戸際まで追ひつめられてゐたので、悲鳴を絶叫して、迫つた
危急の援ひを求めた。

(これぞ眞に潮時！)

さう信玄は感じた。

元龜三年十月三日、甲府、躑躅ヶ崎の館を出發したのだつた。

中原制覇！ それは、信玄にとつても多年、夢寐にも忘れられぬ宿望であつたのだ。

(叡山が、形無しに焼き討たれた。こゝで一兩年ぐづぐづと遷延したならば、浅井は勿論、朝倉もきつと亡ぼされて、織田の地盤は、ますます鞏固、抜き難いものになるだらう。ちやうど今は冬の初めだ、越後では、雪が降り出した。こゝ三箇月の間は、謙信も穴ごもりだ。よしんば躍起になつたにしても、どれほどの動きも、とれまいし、北條も氏康が歿くなつた直ぐ後だから、心配は無いし、それに北條の色目は、近頃では上杉よりも予の方へ、向けられて来たから、全く絶好の機だ。徳川を、家康めを、まづ一揉みに揉み潰して、それから岐阜だ！)

信玄の夫人は、京都の公卿、三條公頼の姫だ。そして、この信玄の夫人の妹姫は、三條家から大坂本願寺に嫁いで、門跡、顯如上人の北の方となつてゐたので、武田と本願寺門跡とは、義兄弟とい

ふ姻戚関係で、結ばれてゐる、のみならず、反・信長といふ最も重要な一點で、利害を同じくするものだつた。

で、かうした関係から、信玄の網は、四方八方へ張りめぐらされて、利害の一致する凡ゆる勢力を抗争織田の、一線につらねて信長を包圍する大きな姿勢を、整へた。

さうして今や擧げた踵なのであつた。
時に天下を見渡すと――

中國の雄、毛利元就は、一昨年七十五歳の高齢で、老病のために藝州、吉田の城で歿したし、關東の主、北條氏康は、昨年十月、中風を病んで、五十六歳を一期として小田原城で死んだし、だから、中原を争ひ得る武將としては、今年五十二歳の彼、武田信玄は、一番の年長者であつた。

――元龜三年でいへば、

上杉謙信が、四十三歳。

信長が、三十九歳。

家康が、三十一歳。

してみれば、信玄が、こゝで意氣込んだのは、當然だつたらう。

なぜかなら、五十二歳では、まごついてゐたら、日暮れて道遠しの感があらうといふものだ。

武田の領土は、このとき、どの範圍だつたかといふと、
甲斐、信濃、駿河の三國は全部。上州は西半國。飛騨の北半分。越中は南部。遠州は北の一部。参
河も東の小部分。

それだけに跨つてゐたから、廣い。

(二)

武田信玄の領土は、實に廣かつた。

甲州一國の主でしかなかつた彼が、一代のうちに、これだけの堂々たる大版圖を領有するに至つた
のだから、偉い。

面積から云ふと、上杉よりも、北條よりも廣かつたのは勿論だし、中國十一州の毛利をも凌ぎ、尾
張、美濃以西、近畿十箇國に跨る織田をさへ、稍越えてゐたであらう。

だが武田領は、なにしろ日本一の富士が根や、今日の謂はゆる日本アルプスの所在地だから、大部
分が山岳地帯で平野や肥沃な耕地に乏しい。

で、面積は當時、全國第一位の武田領ではあつたが、米の收穫は多くないので、百二十二萬石と稱

せられた。

その頃の織田は、二百四十萬石と云はれてゐたから、石數では、武田はちやうど其の半分だ。従つ
て、上洛のために動かし得る武田の兵力は、三萬人以上ではなかつた。しかし、名におふ武田勢は、
百戦練磨の精兵だから、恐るべきものであつた。

信玄は、一萬の兵を領國に残して、上杉氏に備へ、自ら二萬七千を率ゐて、遠州へ侵入し、まづ二
俣城を攻め落した。

整々の陣容 旺盛の士氣。

まさしく不可抗の勢ひだ。

さて、この大敵と戦はなければならぬ家康は、遠州と三河で五十六萬石、その兵力は、一萬四千。
だが、一萬四千は、全兵力だ。

どんな場合でも、ありつたけの兵力を戦場で、動かし得るものでない。

一つの戦場で用ひることの出来る兵數は、せいゝ全兵力の六割から、七割といふところだらう。
で、家康は、織田の援軍三千をも合はせて、約一萬の兵を率ゐて、濱松城を出て三方原まで進んだ。

そして陣を、犀ヶ崖の北に布いて、武田の大軍を待つたのは、十二月廿二日。
朔風、原頭に吹きすさぶ日だつた。

家康は、この強敵に對して、決して勝算があるわけではなかつた。

(敵は三萬、こちらは一萬、——天下無敵と聞えた武田軍、しかも三倍の敵軍と戦へば、わが兵いかに精悍でも、勝ち難いかも知れぬ。だが俺は、勝敗を度外において、決戦する！)

さう覺悟した家康こそは、眞に豪壯そのものであつた。

信玄の武を敢て怖れなかつた者は、前には謙信、後には家康、この二人のみだ。

そもそも三方原といふのは、濱松城の北、およそ十町ほどから、縦三里、横二里に亘つて擴がる高原で、地勢は、南方すなはち濱松側は低く、北になればなるほど高まる、約一〇〇平方キロの廣漠たる草原だ。犀ヶ崖は、次第に低下した此の草原の龜裂した斷層で、裂孔の幅三十尺、深さ二十尺の、溝をつくつて、水が其の底を流れてゐる。

家康が、この龜裂斷面を背にして、布陣したことだけでも、どんなに意氣が壯烈だつたかど、想像される。

織田からの援軍三千の將は、佐久間信盛、平手汎秀、瀧川一益の三人だつた。

これが右翼。

家康は、重臣の石川數正、松平家忠らを左翼に備へさせ、自分は麾下の兵で、中陣。英氣を凝して、肅々と強敵を待つのだつた。

そこで信玄は？

野部の野陣を發つて、天龍川を渡つた。

大菩薩を過ぎれば、三方原だ。

(三)

午後の一時ごろだ。

風は増々冷たく、薄日さへいつしか影つて、どんよりと空は、雪もよひになつて來た。

「なに？ 家康が自身、出馬してゐるのか？ 小癩だな」

信玄は、さう云つた。

前には、小山田信茂が、上原能登を伴つて、來てゐた。小山田は、先鋒の隊長だつたし、上原はその部下の斥候長であつた。いま、上原は敵狀を、偵察して戻つたのである。

「じつに沙汰の限りの、小癩さで御座ります。しかも敵備へは、鶴翼の一段備へ——」

「うむ！ 鶴翼！」

信玄は、報告した上原から、眼を小山田へ轉じた。

「ほとんど、血迷つたとしか思はれませぬ」

と小山田が答へた。

鶴翼の一段備へといふのは、現代の戦術語でいへば、横隊展開とでも云つたら、やゝ當て嵌まるかも知れない。

信玄が、

「して、兵数は？」

「我軍の五分の一にも、足らぬかに相見えませぬ」

上原が答へると、

「僅か六千くらゐの小勢か」

信玄は、この遭遇戦、戦はなければ嘘だと思つた。じつは、家康がもし本城濱松に立て籠るならば若干の兵力をさいて、抑へとし、本軍は、豫定の如く行軍を続け、祝田を経て、刑部へ向ふつもりであつたが、斥候長のもたらした報告によると、意外にも家康は、挑戦も挑戦、大膽不敵な、鶴翼の一段備へで、

(命しらす！)

と、思はせるやうな隊形で、シヤラ臭く待ち構へてゐるではないか。

斥候長は、一萬の徳川軍を、六千と過小に見積つたし、信玄は、家康を、まだ若いと感じた。

(おのれ殲滅してくれる！)

必勝は歴々だ。

忽ち行軍序列は、戦陣序列に變更された。歴々のな優勢縦隊である。

第一線は、小山田信茂、山縣昌景、内藤昌豊、小幡信貞を部將とする四縦隊だ。そして第二軍は、馬場信房と信玄の嗣子、四郎勝頼の率ゐる二大縦隊。その後方が、總豫備隊で、大將信玄が、これを率ゐた。

二萬七千の武田軍は、潮の寄せるやうに迫つて來た。

徳川の軍目付、鳥居忠廣が、

「館！野戦は到底、覺束なう御座りますぞ。速かに、御手先をお呼び戻しに相成るやう！」

退却を提言したのであるが、家康は、にはかに顔色を變へて、背を釣り上げて、

「臆病神に取ツつかれたか？そちは武功の者と思へばこそ、大切な役を申付けたのに、そのやうに腰が抜けて、何の役に立つ！」

さう罵つたので、忠廣も、むツと腹を立て、

「館こそ、日頃は合戦に、御念の入り過ぎるほどの御大將で在したに、今日は何となされましたぞ。」

御顔色を變へて血氣に、逸らせ給ふは心得ず、今に御らんなされませ、拙者の申せし言葉が、御胸に應へようぞ！」

云ひ棄て、馬に跳びのつた。そして眞ツしぐらに戦線へ驅けて行つた。

(四)

誰が、なんと謀めても、家康は耳をかさなかつた。

「それでも三河武士かッ！」

嗚鳴られたのは、渡邊守綱だ。

守綱も亦、一たん敵軍の鋭鋒を避けて、大兵が祝田を通過するのを待ち、後方から仕掛けるならば兎も角——正面衝突は、全く無謀だ、無理だ、と云つた爲に、叱咤されたのだつた。

家康は、顔を、蒼白に曇つらせてゐた。これは、姉川大戦にも見られなかつた極度の緊張であつた。さすが不敵の魂も、信玄といふ大敵を前にしては、興奮せずにはゐられなかつたのだらう。全身から武者ぶるひが出た。

「戦はずして武田に後ろを見せたとあつては、家康の弓矢が廢るッ！」

あれほど織田殿に頼まれてゐながら、決戦を怖れ、甲・信の兵の臆剛に臆して、みすく三方原を通りぬけさせては、なんの面目あつて再び——

(岐阜館に相まみえられようぞ！)

「掛かれッ！」

と、喚ばはる、激撃の命令。

前線の銃隊は、一齊に火蓋をきつて、武田勢の先鋒へ、彈丸を浴びせた。

敵の陣では、甲州流の押太鼓が鳴る。

太鼓の響きに合はせて、揚がる鬨の聲。

その鬨の聲が、消えないうちに、三百ほどの兵が一團となつて、甲軍の先鋒、小山田隊から飛び出して、徳川の前線の硝煙へ挺進した。これは「水股者」と名づけられる礮隊だ。

礮を打つのだ。即ち小石を敵へ投げつけるのである。

石合戦ではあるまいし——冗談ではない、と思はれるかも知れないが、事實、これが甲州流、得意の戦法中の一つだ。

礮の射撃に對して、礮で應戦するなどは、滅茶な話だが、しかし、それでお話になるのだから面白。

武田方にも鐵砲は、無いわけではなかつた。最新式な舶來品には乏しかつたが、むろん上杉や北條なみには此の武器の裝備も、あるにはあつたけれども、甲州流の軍法から云ふと、鐵砲の如きは、どれほどの役に、立つものでは無かつた。要するに突撃だ。勝機を決するのは、悍猛な密集隊の白兵戦だ。鐵砲で撃つなら撃て！ こちらは無二無三に、白兵で突ツ込む。

まづ「水股者」が、礮を打ちながら、槍で突貫する。その踵に接して、密集隊が、白刃をかざして敵中へ躍り込むのだ。

——うわア——
早くも接戦。

小山田信茂は、武田家譜代の大神で、郡内、岩殿の城主であるが、選兵を驅つて、徳川軍の右翼に備へた佐久間右衛門の陣を、一氣に突破した。

佐久間が敗れたので、瀧川一益の兵も、煽りを喰つて、潰えた。

だが、平手の兵は、敢然と敵を支へた。

平手汎秀は、かつて信長を諫めて割腹した中務の子だ。

「えい退くなツ！ 退くなツ！」

なんの爲めに來た援兵ぞや？ かゝる敵を防いで、死んでこそ君命に答へることが出来るのだ。

「死ねツ！」

死すとも退くな。

「一死が何だツ！ 防げいツ！」

と、平手は絶叫した。

(五)

目覚ましく奮闘の末に、平手汎秀は討死をとげた。
右翼すでに潰亂。

中陣から、酒井忠次が前進して、側面へ迫つてきた小山田勢を、喰ひ止めた。

酒井の兵は、苦戦して、三町ほど敵を撃ち退けた。しかし、馬場信房が、小山田勢に優る精銳だつた。

強猛の聞えを競ふ甲兵中でも、馬場、山縣といへば、白眉だ。

その銳鋒には、酒井も敵しかねた。

さて此時、左翼はと見れば、松平家忠は既に破れ、小笠原長善も亦くづれ、本多忠勝が中陣から赴

援して、敵の内藤、小幡を遮り止めたが、山縣昌景のために突破され、剩つさへ、四郎勝頼の兵の殺到に出會つて、亂軍の中に包圍されるといふ危険に、陥つて了つた。

家康麾下の中陣も、今や悉く接戦した。

時に、午後四時。冬の短日は、もはや夕暮れに程もなからう。

雪もよひの空、暗澹と低く垂れて、寒風颯と吹けば、血の臭ひ、草原を渡つて腥ぐさく、死骸は累積して、深手負ひは算を亂し、叫喚の聲は、呻吟と交錯して物凄く、三方原頭は、全く修羅の巷と化した。

「四郎勝頼、白地に黒き大文字、つけたる二本の馬印を、左右の脇に押立て、馬より下り、山縣が人数崩れかゝる右手の方へ、たゞき廻して、御旗本へ、横筋違ひにかゝり、突崩す」と『参河後風土記』にある。

勝頼は、つひに、家康の旗本へ、突ツ込んだのである。

麾下の武將、青木廣次、中根正照は、殊戦して斃れた。石川數正は、自分の部下をすべて馬から下ろして、膝を折り敷いて槍を横たへ、逼進して來る敵を邀へた。

まさしく悲壯な防戦である。

そのとき信玄は、厳しく下知した。

「敵の本陣の後へ廻れ！ 退路を断て！」

武田典厩信豊、穴山梅雪齋信君の兩將は、俄然迂回して、犀ヶ崖を越ゑた。

家康の背面を衝いたのであつた。

前後からの挾撃だ。

徳川軍には、もはや入替る味方は無かつた。八方すべてが、敵だつた。

武田の諸隊は、関を合はせた。

家康は、危急に瀕した。部將の戦死が相次いだ。本多忠真が、斃れた。成瀬正義が斃れた、松平康純、米津政信もまた、敵に首を渡した。

名ある勇士の討死、三百を超え、兵の戦死は、一千以上。

重軽傷の損害は云ふまでも無かつた。

鳥居忠廣も、戦死した。「拙者の申せし言葉が、お胸に應へようぞ」と云ひ棄て、家康と別れた彼は、その言葉通りに屍を横たへて、主君の心を痛ましめたが、しかし家康は、この期に及んでも、決して後悔はしなかつた。

(よくぞ戦つて呉れた。死んで呉れた。徳川の武は、けがされずに済む) 散々に敗れたが、いはゞ本懐だつた。

(存分の戦をした！)

と、思つた時、濱松の城の方角から、馬蹄の音が響いた。

留守居の一人、夏目次郎左衛門が、與力廿四五騎を引きつれて、惨敗の戦場へ、馳せつけて來るのだつた。

(お、夏目の差物！)

(六)

「館ア！」

と、馬を寄せて夏目は、

「な、な、なにとて速う御城へ、歸らせ給はぬぞツ？なんすれば皆々ためらふぞ、早く、早くツ！」

と、喚いた。

家康は、だが、大久保忠世へ、

「旗が低いぞ、垂れてゐる！なぜ押立てんのだツ？」

と、叱りつけた。

旗士は、大久保に嗚鳴られた。

「立てろツ！」

「はッ！」

「旗ッ！御旗ッ！」

「は、この通り！」

はアはア喘ぎながら、旗士は、大將の旗旗を、眞直ぐに、高く押立てた。

敗軍の士卒には、それは勿論、目標になつたが、しかしまた敵の目標にもなつて、

「それ彼處ぞ、徳川殿を討ツ取れ！」

「濱松殿の首をあげよツ！」

と、馬場、小幡の兵が、嘯ツと哮いて、突ッ掛けて來る。

水野左近が、

「防げエー！」

と、取つて返す。

忽ち水野が包圍された。

「城伊菴ぞ、こゝに在り！」

叫ぶ聲が聞えて、矢が来る、彈丸が飛んで来る。

家康は、轡を引返して、水野を救はうとすると、

「えい言甲斐なき御心かなッ！」

夏目は叫んだ。

「館、館ッ！」

血を吐くやうな聲、大の眼を怒らせて、サツサと行く手を押し遮つて、

「た、た、大將たらん人は、後度の功をこそ、心懸け給ふが肝要ぞッ、えい！ 葉武者の働きし給うて何の益かこれあるべきッ！」

忠義に凝つた三河魂の

怒れる眼に涙を泛べ、夏目は馬から跳んで下り、

「ちえ、斯うぞッ！」

むんず、とばかりに主君の乗馬の轡を掴み、遮に無二、濱松の城の方角へ、引いて廻し、

「なにを愚圖々々！」

馬側の畔柳助九郎へ、

「早く御供、申さぬのかッ！」

と、我鳴るも誠心、赤心から。

携げてゐた槍の柄を上げて、

「えいッ！」

ピシヤリと叩く、家康の馬の尻。

ダ、ダ、ダツと響く銃聲——ピユウびゆうん唸る彈丸の下。

ヒツ叩かれた馬は逸物。

さながら宙を飛ぶやうに、濱松さして馳り行く。

あと見送つて（おん身代り！）いざや死なうと我が馬に、躍り上つて十文字の、手練の槍を引きし

ごき、家康の後追はうとする敵の騎馬武者を、二騎、三騎、またゝく間に突いて落とし、迫る其他を追

ひ拂ひ、

「防いで死ねッ！」

と、喚はりつゝ、與力の士二十餘騎と、馬の鼻づら押し並べ、穂先を揃へて、追つて来る敵のまっ

只中へ、とび込んで行つた。

「夏目次郎左衛門正吉が最後の働き、——ならば手柄に討つて見ろッ！」

夏目と、與力二十餘騎とは、殊戦、奮戦、すでに馬を斃され、馬を棄て、血みどれの徒歩だちで、亂闘また亂闘——つひに一人も残らず討死を遂げたのであるが、この間に、家康の生還の途はひらかれた。

だが、考へてみると、この生還は、いはゞ奇蹟に類するものだった。

じつさい能くも歸れた——といふ感じが深い。家康の乗馬は、夏目の槍の柄で、尻を叩かれた爲、疾驅した。あとに續いた家臣は、わづか五騎。

しかも、敵は追及したのだ。

敵の一騎は、弓を持つてゐた。

それが鋭い鐵の矢を番へて、

「やあ徳川殿の胸板に、風穴をくらうぞ」

と、よツ引き放たうとする途端、

「お、おのれ、喝ッ！」

叫びも敢ず、天野康景、疾風と擬ふやうに馬を殺到させて、ハツクと蹴る。

蹴られた敵は、眞ッ逆さまに落馬する。

その弾みに、弦から離れた矢は見當ちがひの上空へ飛ぶ。

一難は去つたが、しかし其時——

「濱松殿と見たは僻目か、汚し、返せ、敵に後ろを見するの catt！」

はや夕暮の薄闇に、槍の穂先も淡光り。けれども、まさしく迫つたのである。

「えいッ」

家康は、馬首を斜めに巡らしさまに、迫つた三騎の敵の中、一騎を見んごと突き落した。残る二騎の槍尖が、躲されて宙へ流れた時、

「斃ばれッ」

天野康景、大久保七郎衛、成瀬小吉の三騎が——揮つた穂先——血塗つた上を血塗つて、敵二騎を三本の槍が貫いた時、また敵一騎。

「たアッ！」

大だんびら、拂つたのは、家康の乗馬の鼻づら。

だが、乗り手は手練。

颯と躲すその隙に、野中三五郎重政、血煙りと共に、馬上から叩き落して、打ち果した。

こと此處に至れば、家康の危急は、實に言葉の外だつた。主従わづかに五騎で、敵の追蹶を、血をもつて遮りのがれたのである。

「これは、相當な首でござります」

太刀の先に刺した生首を、高々と掲げて、韋駄天走りに徒歩だちで走つて來たのは、高木九助だ。

それを見て、家康が、

「汝、その首を、城の大手まで持つて行つて、武田信玄の首、高木九助が打ち取つたりと、大音聲で呼ばはれ！」

と、叫んだ。

「か、か、畏まつたツ！」

喘ぎながら、九助は答へさまに走つて行く。

偽りも、時に依つては方便である。

(城ではさぞかし、惨敗と聞いて、眞ッ青になつてゐるであらう。たぶん生きた氣もなからうから、

信玄の首は氣つけ薬だ)

さう、家康は考へた。

さすがに家康だ。九死一生の場合、そんな風に考へる餘裕のあつたといふことは、驚かれる。果せるかな、高木九助が、大手城門の外で、信玄の首と嗚鳴つた時は、城中の留守兵は、全く蘇生の想ひがしたのであつた。

(八)

家康の生命は、一時まつたく危険に瀕したのであつたが、夏目次郎左衛門とその與力廿餘騎の忠死によつて救はれて、濱松城の畔柳門に歸ることが出来た。

「屋形様のお歸りイ！」

と、喚はる聲が、留守居の人々を、どんなに歡喜させたか？

將士は、躍り上つたし、兵は相抱いた。聲を立て、泣く者もあつたし、轉げこけて嬉しがる者もあつた。

敵の大將信玄の首を、高木九助が討取つたと叫んだのは、眞赤な偽と解つても、群衆心理といふものは妙な働きをする。

(味方總敗軍！)——暗澹となつた氣持が、方便の虚言のために、更生の光明を認め得たのだつた。

「門は、閉めるに及ばんぞ！」

と、家康が云つた。

畔柳門を守つてゐた將は、鳥居元忠であつた。

「なんと仰せぞ？」

「開けて置けと云ふのだ」

「と、とんでも無い事をツ！」

元忠は家康の幼少時代から、補佐の功を積んだ元勳の臣だ。

「莫迦めツ！」

と、家康が叱つた。

「えい館こそ莫迦なツ！」

と、元忠は呟鳴り返す。

三河武士には、主君を呟鳴りつけるやうな場合が、少くなかつた。この純朴さは、おそろく徳川の

家臣の、最も著しい特色の一つだつたらう。

「お頭の具合が、怎うか成されたと相見える。今にも敵は、追撃して参らうに、城門を開いて置いて

寄せて来る敵兵を、さあお遣入りと迎へ入れるお心か？」

元忠は、ます／＼聲を烈しくする。

冬の日には、すでに暮れて、風は雪を持つて来た。

「箒を焚けツ！」

と、家康も、大きな聲を出して、

「門の内にも、外にも大箒を、はやく焚かせろツ！」

「あくまでも、鎖すなと仰言るのかツ？」

「くだい！ 眞ツ暗々と、城門を閉ぢて置かば、却て敵に、氣を吞まれる」

「しからは、明るくして、開けツ放せと？」

元忠が、不承無承な眼を瞪ると、

「地面の砂も見えるほど、明るくしてある開けツばなしの門の中へ、無闇に敵が押し入るものか？」

さう、云ひ棄てゝ家康は、本丸の館へ遣入つて行つた。

元忠も、喉筋を釣り上げて呟鳴つては見たものゝ、考へると怎うやら自分の云つた事が、間違つて

ゐるらしい、と氣がついた。

(館の仰言る通りかも知れん)

さう思つたので、

「篝火を焚けッ」

と叫んだ。

叫んでから（おや館のお聲色に、だいぶ似てゐた）

元忠にも、餘裕は若干、のこつてゐる證據だつた。

さすがに驍勇の士であつた。城門の扉は、これを開放したまふ、白晝のやうに明るく篝火を、焚き

つゝ敵兵の寄せて来るのを待つ鳥居の颯爽たる面魂。

雪が、篝火へ落ちて、ジイツと音を立てた。

(九)

よこれた甲冑を脱ぎすて、居間へ這入つた家康は、愛妾の久野を呼んだ。

「お召して御座いましたか？」

「寒いな、雪が降つて来たぞ」

この場合、寒いのであるのといふ言葉を、久野は聞かうとは思はなかつた。雪が降つて来たことはなにも館のお口から聞かすとも、解つてゐるのに、とさう感じられたのである。

「では御火鉢をもう一つ？」

「いゝや火鉢は、これで結構だ。だが、温まるならば……」

「あ、何を仰しやいまする？」

こんな場合でなかつたら、嬌やかに嬌態をつくつたでもあらうが、愛妾も今は、餘裕が無い。全くそれどころでは無いのである。

（お命さへもお危かつたとやら……それに勝ちほこつた敵方の軍勢が、すぐにも押し寄せてくると申すのに！）

だが家康は、心の中で、

（かうした際には、特に織田殿の真似をするに限る）

と、思ひつゝ、

「とにかく酒だ。ごく熱かんで酒を持って」

「御酒を召上るので御座いまするか？」

「む。それに腹も減つたし、湯漬も食ふぞ、茶は味噌でも、香の物でも構はん」

さう言付けて、久野の運んで来た酒を、まづグウツと飲みほしてから、湯漬の飯も、たつぷり三椀まで、お替りを食べた。

食べ終ると、

「枕を持って」

「あの、お枕で御座いまするか？」

「妙に訊き返すではないか。酒といへば訊き返すし、枕と云つても訊ね返す」

「あアれ！でも今宵は——」

「でも予は、睡いのだ」

「御寝など、遊ばして、お宜敷いので御座いませうか？」

「遊ばしては悪いとでも、申すのか？」

「これでは全く織田殿そつくりの口吻だ——家康は少し可笑しくなつたが、

「早く、持つて参れ」

「ほんたうに御寝み遊ばすなら、お寝間で」

「こゝで宜い。早う持つて」

「ではあの——お枕だけを？」

「さうぢや」

「お居所寝を遊ばして、お風邪でも召しては不可ませぬものを！」

「いろんなことを云ふぞ。風邪など引くものか。鍛へた體ぢやもの」

さう云つて、ふと思ひ出したのは、幼い頃、尾張の那古野で、寒中、雪水をつり込んだ水風呂に這入つたといふ、過去の日のことだつた。

水風呂へは、腕白青年の信長に、這入れと云はれて、這入つたのであつた。

（おゝ！なつかしき想出よ、自分が今日あるのは、ひとへに——偏に織田殿のお蔭だ。——織田殿との盟を守つて、今日は大敵と激しく戦つたが、衆寡の相違、凌ぎがたくて、つひに惨敗した。——

——さて怎うする？一睡りして、疲れを癒してから、籠城か、出て再び闘ふか、二つに一つを決めよう）

家康は、枕に頭をのせると、ほども無く、高駈をして熟睡するのだつた。

久野が、上から搔卷を、そつと掛けた。

（よくまあ、お寝みになれたものだ！）

さう感じたのは、彼女だけではなく、近臣たちは皆、舌を捲いた。

（あゝなんと大勇不敵な御大將でおはすことよ！）

三河武士

(一)

二時間ほど、熟睡して、目をさますと家康は、愛妾の久野に、

「元忠を呼べ」

と、言付けた。

鳥居元忠が、居間に伺候すると、

「怎うちや、大概もう兵の引上げは、済んだであらうの？」

「おびたしい死傷で御座ります。首の無い骸は、戻つては参りませぬし——」

「搬んで来ずば、死骸が戻るか」

「蟲の息の、重傷者は動かせぬし」

「彦右」

「はら」

「捨て置けんな」

「重傷者どもをで御座りますか」

「死骸の片附けは、後でも宜い。敵の出様を見た上でも構はんが、手負どもは、これから直ぐに城へ運び込ませよ。時に——怎うしたぞ敵は？」

「あゝ。敵で御座りまするか、御察見どほり退きあげて行きました。さすが御明察と、皆が、申して居りますぞ。頭が下がると申して居りまする」

「畔柳門までは、来たのか？」

「寄せて参りましたとも、山縣の隊、馬場の隊、その他の諸勢が追撃して、門外までは寄せましたれど、門の扉は開けツ放しで御座りますし、篝火は明あかと燃えて、晝間のやうに御座りますゆゑ、こりや何ぞ計略があるに違ひなしと、怖ぢ氣だつて、そのまゝ引ツ返して参つた脳味噌の足りなさ」

「これさ彦右。自分のことは棚に上げてよ」

「はッは、これは確かに、恐れ入りまして御座るが、手前の脳味噌なら、不足な分は、館から補ひを付けて頂く」

「勝手を申せ！」

家康は苦笑したが、

「退つて、作左をこゝへ寄越して呉れ」

と、云つた。

鳥居が退出すると、まもなく本多作左衛門重次が、遣入つて来た。

作左は、戦塵に塗れた鎧を、まだ脱いでゐない。血の着いた顔を、洗つてもゐない。

「作左。血だらけではないか」

「敵の血でござるツ」

と、坐つて、

「殿のお面は、青いな。まだ御睡りが、足りんと見える」

言葉づかひの、ぞんざいな男である。

「青く見えるかの？ 米が欲しいからちや」

家康が、さう云ふと、

「なに、米が？」

ちいつと、主君を見つめる。

「籠城するには、兵糧だからな、第一が」

その心痛は道理だつた。こゝ三年越し、三河も、遠州も、ひどく稻が不作で、家康自身さへ、時々稗だの、黍だの、粟だのを食べてゐた程だ。

「殿！ 兵糧米が無いから籠城が、成らんとは、この鬼作左が云はせませぬぞ」

本多重次は、自分から鬼作左と云つた。

鬼作左といふ、この渾名は、しかし強勇すぐれた意味の鬼ではなくて、血も涙も無いといふ鬼なのである。

だから、もちろん名譽の渾名ではなかつた。徳川領内の百姓どもは陰口に、

「佛高力、鬼作左、ドチヘンなしの天野三郎兵衛」

と云つたものだ。

(二)

百姓どもの陰口は、なにを意味したかと云ふと――

徳川領の民政の三奉行は、高力與左衛門、本多作左衛門、天野三郎兵衛の三人であつたが、高力

は、年貢米を取りたてるにも、百姓どもが、

「まことに困つてをりますが、お慈悲を持たれまして」と、云へば、

「あゝ道理ぢや、さぞかし困るであらう」と、すぐ同情する。

涙もろくて、遮二無二、自分が泣いて了ふ。ふんだんに慈悲ぶかい捌き方をするので、

「ほんたうにお有難い！」

「佛高力！」

と、渾名が附いたのである。

ところが天野三郎兵衛は、高力奉行が、

「不憫ぢやてのう！」

と、涙ぐめば、

「いかにも不憫でござるよ！」

同情に堪へぬみたいな顔をするが、作左衛門奉行が、

「可哀相なものかつ、何が氣の毒だツ？」

さう啖鳴れば、たちまち尻尾について、

「さうとも〜！ 甘い顔をしたら、きりが無い」

と、自分でも眼尻なんぞを釣り上げる。

作左が、

「右」と云へば、

「右」

高力が、

「左」といふと、

「左」

で、自分の考へといふものが無い。人が、さうだと云へば、それもさうだ。人が、かうだと云へば、これも斯うだ。さつぱり定見の持ち合はせが無いのだから、

「ドチヘンなしの天野三郎兵衛」

なのであるが、作左となると、全で情容赦もなしに、取り立てる。しぼり上げる。不作であらうと、饑饉であらうと、

「無くても出せツ！」

無理やり引ツたくる。

「あゝ鬼だ！」

「鬼作左！」

渾名の起りは、ザツと斯くの通りだ。

百姓どもへの布告を、假名書きにして、

「これにそむくものは鬼作左しかるぞ」

と、後へ附け添へた。

鬼作左に叱られては、どんなことに成るか解らんといふ怖さから、

(食ふものを食はずにも、出さずばなるまい)

作左は、取りたてた年貢米のうちから、千石、二千石、五千石といふ具合に、餘米を人知れず貯蓄

して、窶と積んでおいたのだが、それを知らないから家康は、

「なんぼ鬼作左でも、無い袖は、振れぬぞよ」

さう、云ふと、

「殿、たれが無いと申したツ？」

「だが無い米は無いといふほか無い、では無いか」

家康は、無いづくめだ。

「無いか有るか、御存知もないくせにツ！」

叱りつけるやうに——いや、やうにはなく、本當に作左は、主君を叱り飛ばしたのであつた。

「殿つ！ 血も涙もない鬼よ、鬼よ、鬼作左よと罵られながら、長年とりたてた年貢米から、餘米を

残し、餘さいで、よ、よ、宜いものかツ！」

(三)

血も涙もない鬼作左とまで云はれて、無理無惨に取り立てた年貢米から、剩餘米を蓄へずに置かれようか、米が無ければ籠城難儀といふ、今日の如き危急の場合の用意にこそ、搾取も仕つた。空虚と思はれてゐる米倉の内には、人の知らない米俵が、積み重ねられて七萬石は有らう。

「戦の勝ち負けは、作左めの掛りでは御座らん。負けるより勝つが増は、云ふまでもないが、勝てずば負ける外ござるまいし、負けようと、勝たうと、それは作左の知つた事でなし。但し此の眼の黒い間は、味方の衆に、饑しい思ひは、ダンゼンさせませぬぞツ！」

鬼作左は、昂然と、さう云つたものである。ふゝ良い家來を持つた、と家康は思つた。で、籠城の決心の定まつたことは勿論だ。

(兵糧の心配さへ無ければ、城に籠つて、織田殿の後詰を待つことが出来る)
これも作左の誠心のお蔭だ。

家康は、こみ上げて来る感謝の念のなかで、この風變りな純臣の、いろんな逸話を思ひ泛べた。そして、惨敗の直後としては寔に不似合な微笑みも、おのづと洩れるのであつた。

作左は、生粹の三河武士で、七歳の頃、家康の祖父、清康の兒小姓にあがつて以來、廣忠・家康と三代に亘つて仕へた、といへば可なり老齡と思はれるかも知れぬが、實は、家康より十三しか年上でない。

これは、家康の祖父も、父も、非常に若死をしたから、三代歴仕の老臣たる作左さへ、まだ四十を幾歳も越さないといふ男壯り、

要するに、家康の周囲は、みな若かつた。ちやうど信長の周囲が、甚だ若かつたと同様に、三河武士は新銳であつた。

だが、さうした新銳の若さの中だけに、鬼作左の老熟は目立つた。

とはいふものゝ、此の老熟は、ずるぶん型の特殊なものだ。

まだ家康が濱松に移らぬ前——岡崎の城にゐた時分の話であるが——
岡崎の城下と、池鯉鮒の間の田畑を、見廻つてゐた鬼作左、

「む、これは見事だ、よく出来たなあ！」

と、讚歎の聲も大きく、馬を停めた。

じつさい見事に出来た西瓜畑が、目に止まつたのである。

「どこ村の、なんといふ百姓の丹精だ？」

鬼作左が賞めるなどいふことは、滅多にないので、土地の庄屋は、

(はてな？ 急にお天氣が狂ひはせんかな？)

天を仰いで、空模様を氣にする。

「こつら、誰れが作つた西瓜だツ？」

「はツ、そ、それは御殿様のお上畠で御座りまして、お仲間衆が、お上のお指圖で、お作りなので——

はい、お殿さままでが、お直々に、お畠にお立ちなされますで」

庄屋が、さう返辭をすると、

「馬鹿ツ！」

と、いきなり鬼の雷聲。

(呀っ！)

びつくり、思はず飛び上る庄屋へ、

「以つての外だツ、なんの閑が有つて、瓜なんぞ作るのだツ？」

「申しツ、ち、ち、違ひまする！ お作りになつたのはお殿様です、館さまなんで御座いますツ」

「たは氣！ する事に事を缺いて、西瓜を野良で育てる。沙汰の限りだツ」

「え？」

庄屋は、呆氣にとられた。

(四)

鬼作左の雷聲は、一そう猛烈さを増して、

「いつたい殿様を何と心得るツ」

と、きたから庄屋は彌々、譯がわからなくなる。

「御冗談を！」

「阿呆つ！ 殿様が解らんのか殿様が？」

「そりあ解つてをりますとも」

「解つとるなら何故返辭をせんツ？」

「へい。お殿様は御領主様で御座ります」

「御領主様は百姓かよツ？」

「え？」

「馬鹿野郎ツ！」

「へい！」

庄屋は、なんで斯う叱られるのか、さつぱり呑み込めないが、兎もあれ相手が鬼の雷では、迂闊したことは桑原々々——

「こらツ、昔はな、御領主様も大百姓に毛の生えたみたいなものだつたか知れんが、今は飛んでもない違ひだ。行く行くは天下中の御大將にもお成んなさらう館様だい、變な眞似をなされると、作左承知が出来るものかツ？」

「へい」

「へいでは無いツ、御尤もと云へ！」

なにが御尤もだと、思ひながらも、

「は、御尤も」

と、唯口をさう動かした時——

「おや？ 何と？ 作左は颯と、馬を畠へ騎り入れたではないか。見る見る馬は、西瓜畠を、八重十文字、四角八面に駆け廻つたので、たまらないのは、畠の西瓜もだ。」

ほとんど一つ残らず、馬蹄にかゝつて踏み割られ、蹴り碎かれてしまった。

（こりや何としても、御氣が狂つた！）

庄屋、百姓の面々は勿論のこと、家中の士達も、開いた口から、二の句が出てこなかつた。けれども家康は、笑つて、

「仕様のない奴だな。其方が皆な割つたのか？」

「違ひます。割つたのは馬の蹄ぢや」

作左が、さう嘯く。

「左様か。だが蹄が、西瓜を割つたのは、瓜を作る代りに、何を作れといふ意味か？」

「節——瓜などを作る閑に、子寶でも精ツせと、お作らしめ！」

「はッはッムム！ 子を産ますもよいが、さぞ後が厄介だらう。とても瓜みたいに、簡単にはまゐらんぞ」

家康が、こんなふう云つたのは、奥方、瀬名の方の、酷烈なヒステリーと、嫉妬とに、ひどく憐

まされてゐたからである。

まだ男の子は、一人しか無かつた。妬婦、瀬名姫が、早ばやと産んだ竹千代、すなはち三郎信康のほかには、男の兒を持たない家康は、次男、三男が欲しかつた。

しかし如何に欲しくても、瀬名奥方によつてなどは、もはや今日びでは夢にも想はなかつたし、さうかといつて、奥方以外の女——すなはち側女に、女兒なら兎もかくも、ほしいと思ふ次男、三男を産ませた日には、一體どうなる？

瀬名奥方は、彼女の實家の今川氏が、永祿十二年に、本據の駿河を失つて、まつたく滅びてからは持ち前の性癖である嫉妬が、俄然として、異常な亢進を、じつに飛躍的に遂げたのであつた。

これには家康も、ほとほと持て餘した。

（おれの妻は、一生の不作だ！）

諦めるだけなら、敢て難事ではないけれども、たゞ諦めだけで済まぬから、

（噫、厄介だ！）

(五)

静岡縣見附町の小學校の樓上には、「酒井の太鼓」が、保存されてゐて、明治の末か、大正の初め頃までは時計がはりに打たれてゐたといふ。

明治時代の名優、九代目團十郎が河竹默阿彌作の「酒井の太鼓」を演じた時、この本物の太鼓でなくては、眞に迫る気分が出ないだらうと考へて、それを賃してほしいと見附町へ申込んだと、いふ話も残つてゐる。

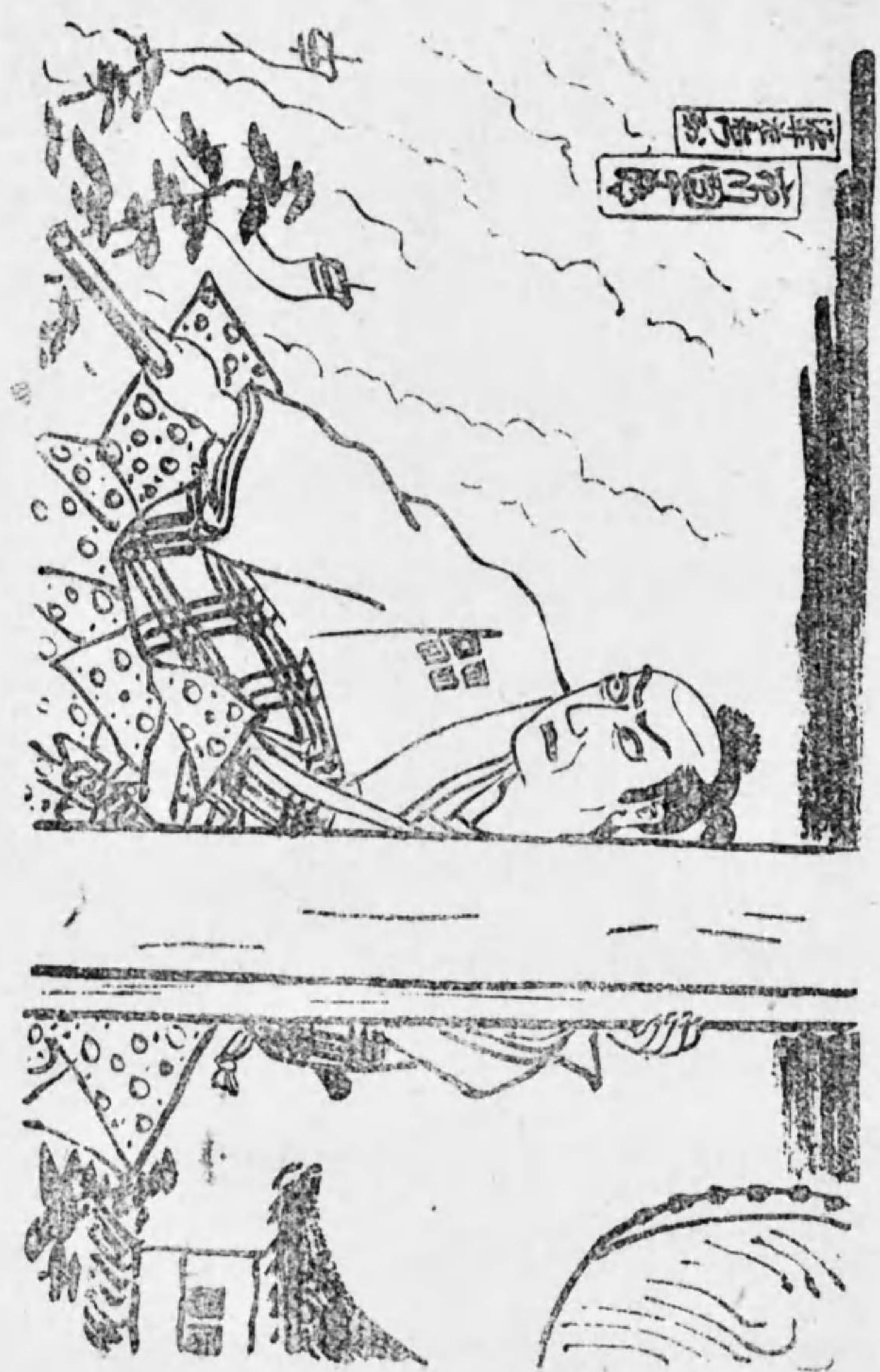
芝居や講談で廣く知れわたつてゐる「酒井の太鼓」は、三方原大敗の夕、濱松城へは頻りに敗兵が戻つて來るところから始まる。

この退却を追撃してきた武田の大軍が、雲霞のごとく城を包圍する。酒井忠次は、肩衣姿で、大杯を傾けて、べろべろに酔つてゐる。千鳥足で、城の櫓へ上つて、醉眼を睜つて攻圍の敵軍を眺めるがやがて眩枕かなにかで、ぐうぐう其處に睡つてしまふ。

暮六つの太鼓を打つために、小坊主が、櫓にあがつて來るが、目の下の武田勢の熾な軍容に膽を潰して、ブル／＼顛へ出す。

そして時の報せの太鼓を、打たうとするが、打てなく。酒井は目を覺まして、

「般を寄せ。どれ、わしが打つて遣はす。其方に代つて、この酒井が打つて遣る。太鼓は斯様に打



つものぢや」

——どん、どん、どおん。

闇に荒む寒風を、劈いて響く太鼓の音。

寄せ手の本陣で、この音響に耳を澄ました武田信玄は、

「おう天晴なる打ち込み様かな。陰陽の音律いさゝかも亂れず、耳を劈く強き響きは、負けたる者の

太鼓とも覺えず。む、さすがは三河勢——この城、たやすく落つるとは思はれぬぞよ。深入りをして

不覺をとらば、曲事なるぞツ！」

と、云つて、攻圍を解いて撤退するやうに、山縣、馬場の諸將領に命じた。

これが謂はゆる「酒井の太鼓」の筋だが、史實から云ふと、全くの作り話だ。

尤も、作り話にしては辻褃の可なり合つた方である。だから眞實らしく聞える。多くの人に知られ

てゐる話だけに、こゝで訂正して置くことも、あなたがち無用な道草ではないやうだ。

第一、酒井は、この日の三方原合戦には、右翼の部隊長として、壯烈な意氣で惡戦苦闘した。佐久

間信盛、瀧川一益の兩隊の敗走と、平手汎秀の戦死の後を、引き受けて、徳川家隨一の重臣たる身に

相應しい働きをしたのだつた。

その酒井が、暮六つ前に、肩衣すがたで、酒なんぞを飲んでゐるのだから、馬鹿々々しさを通り越

した話だ。

千鳥足の、眩枕だのと、暢氣な沙汰ではないのである。おそらく其の時刻には、敗軍の兵を糾合す

るために血眼であつたに違ひない。

また武田勢が、濱松城を圍んだといふのも、嘘だ。畔柳門まで追撃して来た先鋒部隊の尖兵が、引

ツ返したのは、前に云つた通り、城門が開いてゐて、大篝火が門の内外を、白晝のやうに明るく照ら

してゐたからだつた。

引ツ返した武田勢は、その夜、犀ヶ崖に集結して、そこに野營の陣を張り、諸隊はいづれも警戒を

嚴重にして、城からの夜襲に備へた。

霽雪の闇の夜に、城と、犀ヶ崖とは、屹然と相對峙した。

(六)

「夜討ちを掛けようとするが」

と、大久保忠世が、片腕を、白い布で釣るしながらも、片方の肩を、おツそろしく怒らせながら、

酒井の前へ、やつて来て、突ツ立つたまゝで、

「いかゞぢや？」

と、云つた。

「その姿でか？」

酒井の眉が、擧む。

「姿を訊いてゐるのでは御座らんツ！」

と、大久保が呟鳴る。

「しかし無理ぢやよ」

酒井は、頭を揺すぶる。

「なにが無理ぢやツ？」

「これさ、さう我鳴らずとも聞える」

「夜討は止せとお言ひかツ？」

「敵の警戒は、むしろ嚴重にちがひないから、今夜掛かるのは無謀ぢや」

酒井は、夜討に對しては、消極的な考へしか持たなかつた。どれほどの効果もあるまいと思ふと、

敗残の兵を、このうへ酷使して夜襲するなどは、愚の骨頂だといふ氣がするのだが、

(自分の氣持通りに云つたら、どんなに怒るか解らん)

で、せいぜい無謀ぐらゐな所で、あしらふ外なかつた。

「話に乗らんとあらば、宜敷い」

「怎うする？」

「怎うしようと、大きにお世話ぢや」

大久保は、主君の許可はもう得てゐたから、氣が強かつたのである。

天野康景を誘ふと、

「む、面白〜」

すぐに、尻を上げて、

「鐵砲ツ！」

と、叫ぶ。だが、これも負傷して、跛をひいてゐる。

大河内政綱は、ほとんど全身に繻帯を捲きつけて、唸りながら寝てゐたのであつたが、むつくり起

直つて、

「俺も一緒に行くぞツ！」

と、云つた。

「え？ お許が、その重傷では無理だよ！」

と、さすが勝ち氣の大久保が、目を白黒する。

「なにが無理ぢやツ？」

利かぬ氣の、上には上があるものと見えて、瀕死の重傷に喘ぐ大河内が、

「鐵砲組ッ！」

出ない聲を、無理に出して、自分の家來どもに、夜討ちの支度を命じるので、

「大河内！」

「なんだ？」

「なんだでは無いよ。お許は止して呉れ！」

「止せとは何をか？」

「夜討ちをさ。その體で出掛けて行つたら、敵陣へ行きつくまでに、命が消えるぞよ」

「消えても苦しくない」

「無茶を申すな」

「かうしてゐても無い命かも知れん」

全く大河内の重傷では、ちつと寝てゐても、助かるか怎うか疑問だつた。

(どうせ無い命なら——)

大久保と共に夜襲して、三河武士の魂を、敵に見せて呉れよう。

さう覺悟を決めたのであつた。

「その決心なら、止めはせぬ」

悲壯な思ひで、大久保も同意を與へた。

「それで、馬に騎れるのか？」

「騎れるとも！」

(一)

大久保忠世、天野康景、大河内政綱の三人は、めいめいの部兵の鐵砲わづか百餘挺で、——だが釣瓶射ちに、敵陣へ彈丸を撃ち込んだのであつた。

「呀ッ夜襲だ、夜討だッ！」

「あわてるな、夜襲は夜討と昔から、きまつてる」

「おうい。そりあ俺の兜だ」

「道理で頭が遣入らんと思つた」

「や、訝しいぞ鐵砲玉は、後ろから飛んで来るらしいぞッ！」

「まさか味方の裏切ちやあるまいな」

夜襲隊は、間道から、敵陣の背後へ廻つて射撃したのだが、寒雪の暗夜のことだから武田の兵は狼

狽した。夜襲隊の兵力の多寡が解らなかつた。鐵砲百挺きりと解れば、なにも周章へるに及ばないのであるが、油断するなといふ命令で、警戒は嚴重にしてゐたものゝまさか今夜、掛かつて來ようとは思はなかつたのに、いきなり陣地の後手から、釣瓶射ちにやつて來られた。

「ちえ、あれほど負けた癖に、呆れたもんだな」

「三河の奴等ア肋骨が足りないんだ」

「てへえ此方の肋骨に、穴の開かんやうに氣を附けるやい」

武田方の前衛陣地は、闇の中で騷擾した。

人馬が、犀ヶ崖に嵌まつて、死傷した數も、決して少なくなはなかつた。だが奇襲隊の方でも、寒雪で火繩は消されるし、氣は猛つても、肝腎な體が利かない。疵は痛むし、綿のやうに疲れてはゐる。

「敵の度膽を抜きさへすれば——まあ今夜は是れでいゝ」

夜討の面々は城へ引揚げた。

全局的に云へば、敵に與へた損害は、知れたものだ。しかし精神的に武田勢は、

(侮り難い)

と思はされた。

この打撃は、大きい。

(濱松の士氣は、いかに惨敗しても、一向挫けてをらんやうだ)

信玄はさう感じた。

翌る日、千餘級といふ首實檢を濟ますと、

「刑部へ」

と、命じた。

三方原から陣を撤して、刑部で新年を迎へることにしたのである。

「刑部の陣中にて、馬場美濃守申しけるは、このたび三方原御合戦に、討死の三河武士、雑兵下々に至るまで、烈しく勝負を仕らざるもの一人も無しと見え候。その證據には、死骸、こなたに轉

びたるは、うつむきになり、濱松の方へ轉びたるは、あをのけに成り申候」

これは、馬場信房が、信玄にむかつて述べた感想だつた。

「五年以前、初めて駿河へ、御出陣の砌、徳川殿にお譲りあつて、御入魂を結ばせられ、御縁組など遊ばされましたならば、嗚う！」

と、馬場は續けた。

「莫迦を申すな」

信玄は、苦わらひをした。

「館！ 徳川殿を敵になされた事は、返すがへすも御不覺——」

「馬場。あれは信長へ焦げ附きぢや」

「しかし徳川殿は織田の旗下では御座りませぬ。歴乎たる國持大名でおはす。あの殿を、お先手に遊ばせば、今年頃は、中國、九州までも、武田家の御手に入つてをつたかも知れませぬに——」

(二)

桓々たること虎のごとく、鯢の如く、熊の如しといふ。

家康は桓々の英邁——三河武士は、虎、鯢、熊であつた。

あながち結果から推すのではないが、家康と、その軍隊を、敵にしたのは武田信玄の、一生の不覺だつたし、これを無二の味方として、かたく保持することの出來た信長は、幸福であつたと云へる。

家康なかりせば、武田は織田を打倒して、中原を定め得たであらうか？

この題目には、興味が津々と繋がる。

信長に代つて信玄が、中原に覇を稱へたらう、とは考へられない。だが然し、信長の制覇が、あれ

ほど速かに成らなかつたことだけは、慥だ。非常に妨げられたであらう事には、疑ひがないのだ。

もし三方原に激戦が起らなかつたとすれば、武田軍は、颯風が草木を靡かすやうに遠州、参州の二國を通過して、尾張平野を冒したであらう。

刑部で兵馬を、休養させる必要もなく、そこで越年して天正元年をむかへるには及ばなかつたらう、また三河の野田城を、二箇月にわたつて圍むといふやうなへまも無くて濟んだらう。

すでに一旦、尾張を扼せば、たゞちに織田の本城岐阜に對して、壯大な攻め方も出來たらう。あるひは又、岐阜を白眼で睨みつゝ、伊勢へ侵入したかも知れない。上洛の路を伊勢にとれば、そこには前の國司、北畠具教が宜くこそと迎へたであらう。

むろん、これらは總て假定である。さう成つたかも知れぬが、さう成らなかつたかも知解らない。

だが少くとも信長は、武田のために苦汗を嘗めさせられたに相違ないのであるから、この武田を支へ防いだ家康にむかつては、どれほど感謝してもいゝわけだ。

で、信玄は、刑部の陣中で新年を迎へた。京都の將軍義昭や、本願寺の門跡はじめ、反信長聯盟の群雄は、

(訝しいではないか)

(三方原で、徳川勢を散々ツばら打ちのめして、首の數を、千何百も取つたといふのに——なんで間

誤つてゐるのだらう?)

額に、八の字を描いたり、

(自烈たいな!)

と、しびれをきらしたり、地だん駄ふんだり—

だが信玄は、刑部から三河へ遣入るには遣入つたけれど、野田城を圍んで、また長陣を布いてしまつた。

そして或夜のことだ。

早咲きの梅ヶ香を、月明の夜に問ふといふ風流心をおこした。

梅花暗香といふから、闇夜の方が、梅の花は佳く匂ふのかも知れない。しかし信玄が、花の薫りを訪ねたのは、月のあきらかな夜であつた。

これが月の明りの無い暗香だつたなら、こゝに禍の因子が蒔かれなかつたであらうに、とかく好事魔多し。

信玄の耳には、ふと微妙な音律が響いてきた。

(おゝ、笛の音!)

その音は、泣くがやうに、むせぶがやうに、あるひは亮々と高く、綿々と低く——

梅の異名を、好文木といふ。

武田信玄の若い頃は、文學青年だつたと傳へられてゐる。文學好きであつたから好文木すなはち梅を好んだ譯でもあるまいけれど、月明の梅林を逍遙つた。

逍遙ひつゝ、ゆくりなく笛の音を聞いた。

笛の音は、信玄を誘つた。

誘はれて足は、梅林から枯野へ出た。

そこは冬枯れのまゝの原であつた。早春は魁けて咲く梅の梢には見えても、地面に若草はまだ芽ぐまず、凍つてはゐなかつたが乾いてゐた。ガサ、ガサ、枯草が踏まれる。

鏡のやうな寒月が、皓々と、空に冴え、信玄の影法師を、黒く投影する。

(何者の吹く笛の音であらう?)

陣中の風流か? だが、こんな名笛が、わが陣營の兵によつて、吹奏されようとは思はれない。では、里人の吹く笛か?

枯野の彼方から響いてくるのであるが、吹く人の姿は見えない。

信玄は、しばらく魅せられたやうに、聞き惚れてゐた。

「館さまア!」

と、呼ぶ聲がした。

佇んでゐた信玄は、踵をめぐらす。

數名の近臣どもが、梅林の中で見失つた主君を捜してゐた。

「いづくに在すぞ、おん館ア?」

「信玄は此處ぢや」

大きな聲で、答へた。

——噫、それが悪かつた。

枯野の彼方の月影では、

(や、あの大入道が、敵の大將、信玄公なのか!)

と、思つた。そこからは、信玄の姿が見えてゐたのだ。原と云つても、林間によくある空地にすぎないのであつた。信玄の方からは見えなかつたが、笛の吹奏者も、入道だつた。村松芳林といふ、城兵の一人だ。

この笛入道も、ほんの氣まぐれから、ふらふらと一管の笛を携へて、城から月明の野へ逍遙ひ出たのであるが、偶然な大發見をした。

(信玄公は、よつほど笛が好きらしい)

ふと——或る考へが、胸に泛んだ。

(よし！ 明晩も此處で——)

村松芳林は、野田城内に戻ると鳥井三左衛門に、この事を話した。

「猫の子一正來ないかも知れんがもし信玄公が、明晩もまた現れたら、それこそ殊勳の甲の甲、第一等の大手柄が、立てられようといふものだ」

「左様々々！」

「當るも八卦、當らぬも八卦だ」

「いかにも！」

相談が纏まつて、翌晩、兩人は出掛けた。

芳林は笛。三左は鐵砲。

昨夜と同じ場所、笛が吹き鳴らされた。——武田の本陣の裏手につゞく丘。その麓の梅林を縁どる原なのである。

笛の音が、冴えた。

哀々と緩く、切々と急に——空の月も嘆き、地の枯草も愁へるかと思はれるばかりの妙音に、今宵もまた信玄は、魅せられたかのやうに誘はれたのであつた。

「來たぞ！」

笛の吹き口で、芳林の唇が叫び動く。

「む！」

眼ひ定めて、鳥井三左は火蓋をきつた。

パアーン。

(四)

信玄は、頭を押へて、蹲くまつてしまつた、彈丸は頬肉を穿つて、耳朶を傷つけただけであるから決して重傷ではなかつた。

しかし信玄は、カツと灼熱感をおぼえた瞬間には、片頭くらの吹ッ飛んだやうに感じた。その突嗟の愕きは、川中島で敵將上杉謙信に斬りつけられた比ではなかつた。あゝ、もう駄目だと思つた。パ

ツタリ仆れて忽ち息が、絶えるだらうといふ氣がしたのであるが、仆れもせず蹲くまれた。
近臣どもは、

「曲者ッ！」

と、叫んで半數は、鐵砲の音の發した方へ走つたし、半數は主君入道の介抱をするのだつた。笛の
芳林と。鐵砲の三左とは。逃げ足が早かつた。追つた者どもは、追ツつかなかつた。

やがて信玄は、淺疵であることを判然、意識した。だが従者たちは、多量の出血を見て、膽をつぶ
した。

陣屋へ搬び込まれて、典醫の手當を受けると、信玄の元氣は恢復した。

「もう大事ないぞ。予の怪我は。諸陣の兵どもへは、知らさぬ様、秘して置け」

信玄らしい用意周到さから、さう命じた。

だから、重臣と、側近とが、知つたのみで、この奇禍は秘密を保たれてゐた。攻圍軍の諸部隊の兵

どもは、總大將が狙撃されて負傷したなどは、さらさら思はなかつた。

寄せ手の陣營に、なんらの動搖も見えないので、城方は首を傾けて、はてな？

(こんな筈はないがな)

鳥居三左は、たしかに射ちあてたと云ふし、笛の芳林も、信玄の仆れたのを目撃したと云ふが――

敵軍に動搖の兆が絶無なことから考へると、どうも兩人の言葉どほりには信じられない。

「信玄公と思ひきや、とんでもない別入道ではなかつたのか？」

「さうらしいの。初手から話が、うま過ぎると思つた」

「嘘をつく彼等ではないがな」

「嘘をつく氣はなくても、彈丸にあつたのが信玄公でなければ、嘘と變はらん」

城の兵力は、最初から千にも足りなかつたのが、籠城の日が重なるにつれて、死傷者が増すから、

心細い。

城將は菅沼新八郎であつた。濱松からの援兵を、ひたすら待つたのであるが、笠頭山までは五千の

援兵が来た。しかし、絶対に優勢な武田勢の攻圍陣へ、野戦を仕掛けるのは、自ら潰滅をもとめるこ

とだ。

では何故、濱松から笠頭山まで出て来たかといふと、この後詰めは、要するに示威の、牽制策でし

か無かつた。

さうでもしてゐる間に、織田の援軍が到着するかも知れないし、それが色んな事情の爲に、來られ

ないとしても、武田勢の出足を、ひき止める役には立たう、といふのであつた。

野田城は渺たる小城でしかない。

この小城を、武田勢は二箇月にわたつて圍んだ。菅沼新八郎が、いきほひ窮まつて開城した時、信玄は、山縣昌景を、この城に留め、自分は鳳來寺に移つて、傷の治療につとめた。浅疵の——すぐ癒ると思つた鐵砲創は、意外に癒り方が、はか／＼しくない。とき／＼高い熱が出た。

典醫は、ひそかに腕を拱いた。

(丹毒！)

(五)

伊勢の北畠具教からは、

「なにとぞ當國を経て、御上洛ありたし、もし伊勢路御通過とあらば、吉田濱まで、船舶あまた差廻し、せいぜい御用相勤むべし」と、云つてきた。

信玄は、熱に苦しみながらも、上洛をあせつた。

(あゝ、西上！)

旗を瀬田に立て、歩武堂々と都入りの出来る日は何時ぞ？

(公方家は勿論、そして本願寺はいふまでも無いし、朝倉、浅井、三好、松永、山門の殘黨は、いかにかり予の上洛を待ちわびてゐることか？)

信玄は、馬場美濃守を枕邊に呼んで、

「越後の謙信が、織田へ同盟を申入れたと、云ふではないか？」

と訊ねた。

高熱で、舌も可なり纏れてゐた。

「館御西上の裏を描くためには、織田・徳川・上杉の三國同盟を結ぶほか無かるまじと、申入れたといふことで御座ります。但し上杉が、同盟締結の條件として持ち出しましたのは、一つ、叡山の再興——いま一つは、朝倉義景館の希望を容れて、浅井攻撃を中止すること——右の二つだと申します。されば、織田としては、容易に乗れる相談では御座りませぬ。信長が、あゝも沒義道に、無残に焼打つた叡山を、今さら再興いたす筈も御座りませぬ、姉川であれば激しく戦つた浅井、朝倉が、深い怨を、たとひ一時の調略にもせよ、なんで忘れた顔をつくれませうや？」

と、馬場が答へた。

信玄は、丹毒の病患に、どうかして打ち克たうと思つた。

その念力のせぬか、熱が下つた。
衰弱は酷かつたが、三月の中頃は、断然と西上を、ふたゝび決行しよう、といふ氣力が恢復して
きた。

で、愛子の四郎勝頼に、

「そちは、濱松を押へよ」
と、云ひつけた。

兵一萬を率ゐさせて、家康が濱松城から出撃の出来ぬやうに、ガツチリと喰ひ止めたのであつた。
そして自分は、輜で、本軍に號令しつゝ吉田へ進んだ。

ところが、衰弱の體を、無理に動かしたことは俄然、病勢を逆戻りさせた。

逆戻りは病勢だけではなくて、武田の全軍も、また長篠へ引ツ返さなくてはならなかつた。

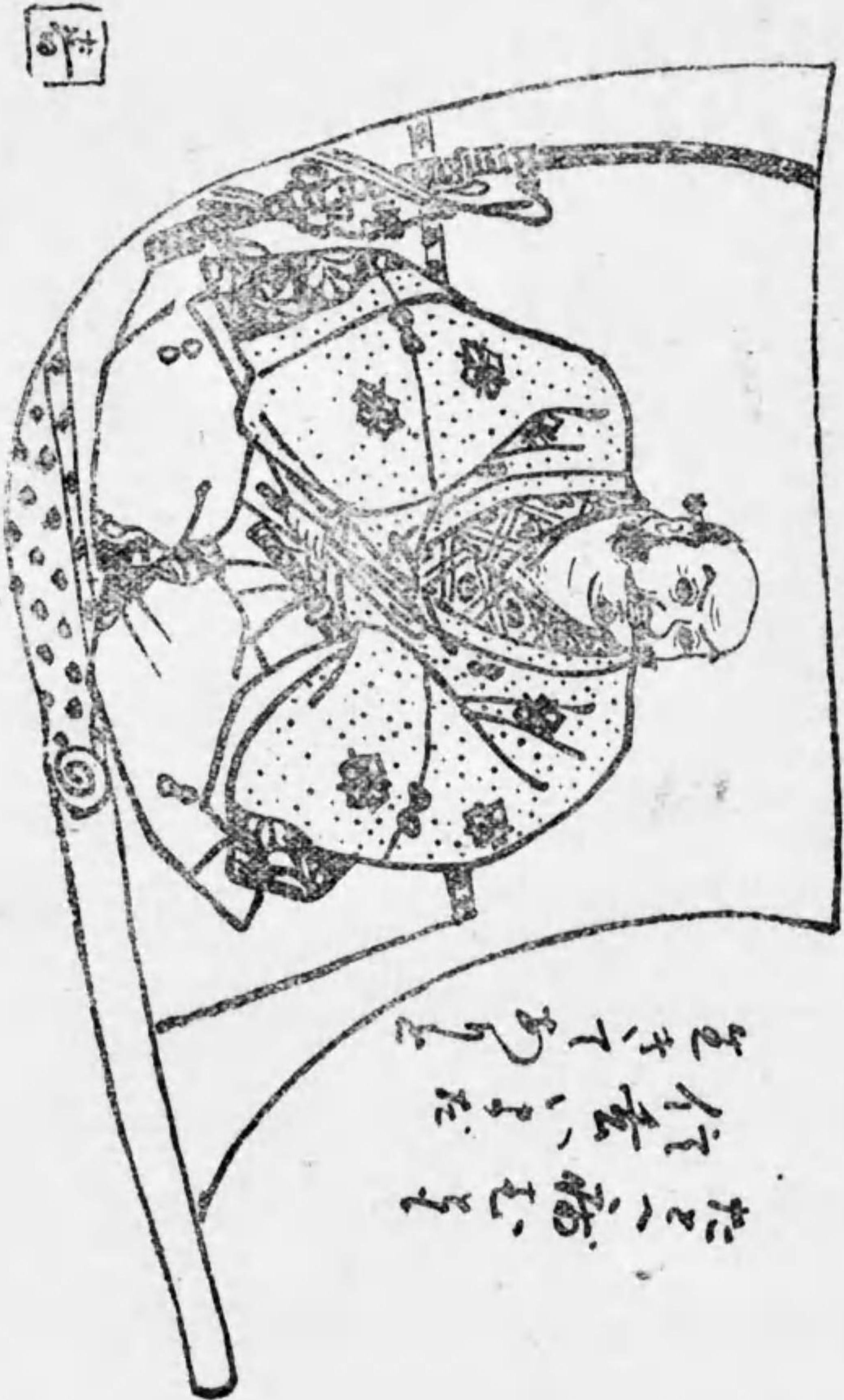
(無念ぢや！)

信玄は、わが生命のおぼつかなさ、自覺して、信州へ——伊奈へと思つた。

ほんたうに重態に陥つたのである。

伊奈への途中、波合郷の治部といふ場所、いよいよ危篤——

「馬場、山縣、内藤の三人を——」



だつて、福だ
ん、おれ
ん、おれ

呼べ、と信玄が云つた。

長い遺言が、瀕死の喉から、途切れ、途切れに洩れてくる。

「長櫃の中には、花押だけした白紙が、八百枚ほどあらう。萬一の曉を慮つて、用意しておいたものぢや、予が死んでも、喪は三年間は極秘にして、もし書状の必要あらば、今申した白紙に記すがよい。病中ゆゑ、文言は代筆、と云ふならば——たとひ病むとも信玄いまだ生きてありと聞かば——」
聲は、だんだん細つてきて、喉が、せいぜいせい、と鳴るのだつた。

(六)

信玄は、だが續けて、

「まだ生きてゐると思はれてをる間は、武田の領土を、奪らうと覘ふ者はあるまい。小田原の氏康父子は無論のこと、謙信でも、信長でも、これまで武田の領國へは、たゞの一步も侵入したことが、有つたか？ 自分らの國をこの信玄に奪られたくないとは思つたらう。——だが信玄の國を奪らうとは考へなかつたぞ。謙信とは度々戦つた。——彼だけは強かつた。上杉からは是れといふ城は取れず互角の、物別れをした。しかし北條からは、上州の西半分は取つたし、足柄城も、古澤城も取つた。

徳川からは、二俣城を、野田城を奪つたし、織田からは岩村城——惠那城、それから瀬戸城を略した。予——予——は四方の敵に、一城も渡さなかつた。これは信玄の誇ぢや。武田の強味ぢや」

瀕死の際にも、兵馬の精銳を強調して、

「こなたから仕掛けぬ限り、敵は戦ひを避けるだらうが、もし敵が押寄せたらば、むしろ深入りさせて要害で防げ。そして三年後の四月十二日に、わが遺骸を諏訪の湖水に、具足を着せて沈めよ。必ずそれまでは讀經も無用、弔ひも要らぬぞ。——予の死んだことを、三年間秘し得れば、武田は絶対に安泰ぢや」

さう云ひをはつて、しばしは、苦悶に顔を、物凄く歪めてゐた。

脈はもう結滞したり、ごく微になつたりしてゐたし、呼吸も、迫る臨終を想はせるものだつた。にも拘らず、

「予よりも、謙信は九つの年下、信長は十三の年下、家康は二十一の年下……」
と、云つた。

馬場信春は、堪りかねて、

「館ッ！」
と叫んだ。

もう聞きとれぬやうな微弱な聲が、

「だが——勝頼は、謙信よりも十六若い……信長よりも十二……家康よりも四つ若い……焦らずに待て……、待て、と申せ……諏訪法性の兜は……孫子の旗は……」

358

そこまでは、ともかくも響いた。

しかし後は、ふツつりと消えた。

英魂は、肉體を去つて、亡骸は冷たく残つたのである。

行年五十三。天正元年四月十二日、信玄は、世嗣勝頼が、焦らなければ宜いかと案じつゝ死んで行

つた。臨終に逢つた重臣たちは、悲歎の涙せき敢ず、中には聲をあげて泣く者も交つた。けれども泣いてゐられる場合ではなかつた。

武田道遠軒は、信玄の弟で、齡は大分違つてゐたが、よく肖た双生児よりも、もつと能く似てゐたのである。

「道遠軒どの！」

「おう！」

「貴殿に、三年間は、おん身代りになつて頂く」

「三年間？」

「御遺言でござるツ！」

と、山縣昌景が云つた。

「しかし——」

「いや三年の間、おん喪を秘めねば相成らん」

「無理ぢや！ 一時ならば、お身代りも勤まらうが——」

道遠軒は覺束なく思つた。

「いかに御無理でも、勤めて頂かねば相成らんツ！」

と、内藤信豊が、うつかり大きな聲を出した。

「しつ！」

馬場が、制した。

(七)

道遠軒は刑部少輔信綱入道の號で、信玄の四番目の弟だつたが、容貌だけでなしに、體の恰好から、ちよいとした動作の癖までが、そつくりであつたのが役に立つて、亡き兄が、まだ生きてゐると

359

いふ身代りに仕立てられた。

「信玄公おんわづらひの爲、甲府へ御歸還、躑躅ヶ崎屋形にて、當分御靜養あそばさる」
かう告れが出た。

遺造軒は、病中の信玄に成り濟まして、轎で信州から、甲府へ歸つた。

だから、家中の人々も、信玄が此世を去つたとは思はなかつた。波合郷の治部から、遺骸は、極秘のうちに甲府へ送られ、げんぢうに防腐の處置が講じられて、塗籠の中に安置された。

遺言どほり、回向も、讀經も、一切行はれなかつた。生前と少しも變はらぬやうに、命令書にも、用事の手紙にも、交際の儀禮的な書状にも、信玄自筆の花押があつた。

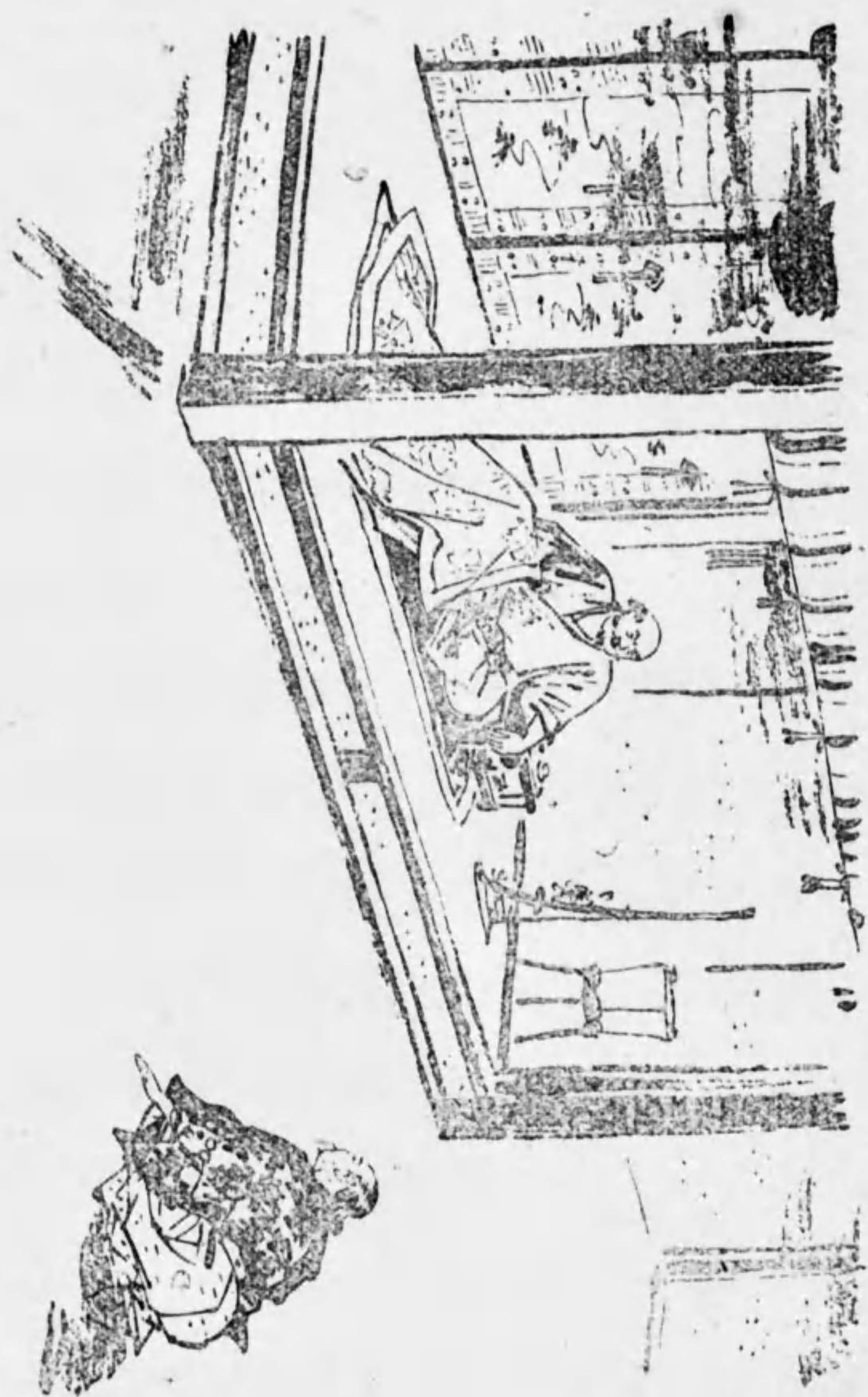
だが、いかに匿しても、どこか訝しい所があるものだ。なかんづく人の死といふものほど、匿し難いものはないらしい。それが英雄の死である場合、なほさらだ。

身代りの遺造軒が、どんなに本物らしく見えても、信玄その人が此の世に有ると失いでは、甲州の空氣の肌觸りまでが、なんとなく違つて来る。

まづ小田原で逸早く、

「どうも武田館は、お逝ぎになつたらしいぞよ」

「む、生きて在さぬといふ感じだなう」



信玄は死んだのだ、といふ評判が専らだつたので、氏政は、坂部雪江齋を特使として、病氣見舞に甲府へ派遣した。

死の虚實を確める任務の雪江齋が、躑躅ヶ崎の屋形へ着くと、

「どうぞ此方へ」

と、導かれた。

病床へ案内されたのである。

まだ夏も去らず、きびしい残暑の熱気が、閉め切られた室を、まるで麴室みたいに、息ぐるしくしてゐた。

(これで重病のお體に、障らないのか知ら？ いや／＼是れは訝しいぞ)

室内は、暗かつた。晝間ながら燈された細心の灯が、わづかに燭臺の近くだけを、うすぼんやりと照らしてゐるのみ。

吊り衾の病褥に寝てゐるのは、だが疑ひもない信玄だ——と、雪江齋は思った。

氏政からの見舞ひの言葉を述べると、

「辱けない。信玄が宜敷く申したと、傳へられい。この通り聲にも力が、戻つてまゐつた。遠からず本復いたさう」

さう云はれたので、雪江齋は案に相違して、旅館に退つた。

「だが後で考へて見ると、信玄が寝てゐたと思つたのは、別の人が信玄をよそほつてゐたのかも知れない。

(顔も聲も、そつくりではあつたが——)

瓜二つに能く似た人も無いわけでなし、たしか弟の逍遙軒は、信玄と見まがふくらゐであつた。

(あれは逍遙軒——でないとは云へないぞ)

雪江齋は小田原城へ歸つて、見たまゝ、感じたまゝを、復命して、

「結局のところ、怪しう御座りまする」

と、云つた。

これでは甲府で喪を秘しても、どれほど効果があつたとも考へられない。

信玄の死は、いつしか諸國に、知れ渡つたのであつた。

虎御前山

364

(一)

信玄は中部日本の東縁を、ほとんど横断する勢ひで蟠まつた巨豪であつた。彼の在世中はさすがの家康と三河武士も、たゞ全力を傾倒して防ぐだけが精一ばい——いや寧ろ防ぎかねて、高天神を陥され、二股城を抜かれ、鳳來寺、長篠、刑部、野田城をつらねる一帯の地を占領されて、徳川領は、ずゝぶんと削減された。

ことに三方原大敗の折は、濱松本城の運命も、いはゞ、風前に危い燈火のやうにさへ見えた。思はざる禍ひの爲に、信玄が死するまでは、家康の蒙つた壓迫は、實に餘人なら、到底休へ得られぬものだつた。

家康なればこそ、持ち堪へたのである。

かうして徳川が、死力を竭して武田を防ぎ支へてゐた間に、信長は何を怎うしてゐたであらう？

そして猿面藤吉郎は、いかにしてゐたか？

信長が、しなければならなかつた事は、多岐多方面で、まづたく色々様々であつたから、それをゴタゴタ並べた日には、いたづらに、印象を不鮮明にするだけで、視野を、しばらく猿面へ向ける。

猿——も今はすでに、江州長濱五萬石の大名、木下秀吉。

織田の旗下において、颯爽と目立つ、部將の一人となつてゐた。

「さあ右から、年の順に並べ」

秀吉は、手に持った鞭の頭で、路上の土に横一線をひいた。

南蠻舶來の、赤ビロウドで作つた陣羽織を着用に及んだ態は、立派やかと云ひたいが、正直なところ、御世辭にもそんな讃め辭めいた形容は、あて嵌まらない。

そんなら、赤ビロウドが似合はないのかと云ふと、大ちがひ、餘りにもシツくり、似合ひ過ぎるのである。

飼はれた猿——商賣用は猿廻しの猿、愛玩用は、物好きな家庭の一員に加へられた猿、などは、赤いチャンチャンコを着用する。

この赤い着物を、想ひ出させるのが、秀吉の陣羽織だ。

365

「殿——」

と、十三歳の虎之助が呼んだ。

「なんだ？」

「市松とは同じ年ですが——」

「馬鹿野郎っ！」

秀吉は、そつくり信長を、真似た積りだが、どうも馬鹿ツといふ呼吸がまだ、本物とは、かなり距離がある。

「市の方が、おそ生まれだらう？」

「はい」

「そんなら助、吉、虎、市の順だ」

助作は後の片桐且元で、このとき十八歳。

佐吉は、石田三成で、十四歳。

虎之助は、加藤清正で、十三歳。

市松は、福島正則で、おなじく十三歳の運生生まれだ。

「爪先を線から出すでないぞ」

年若い四人の家來は、スタートの一線に並んで立つた。

徒競争が、始まるのである。

はるか向ふの決勝線には、竹中半兵衛重治が、赤い小旗を持って立つてゐた。

スタートから、ゴールまでは四百メートルもあらうか。竹中の形が小さく見える。

一直線の道路だ、路の幅は十八尺。

坦々たる軍用道路——これは秀吉が、小谷城の敵、浅井軍と對峙するために造らへたものだ。

「用意！」

と、秀吉が聲を掛けた。

(二)

虎之助も市松も、づば抜けの大男に生まれついたのであるから、歳は十三でも、身の丈はもう猿面主人よりも高かつた。

並んで見ると、身長は四人のうち、虎之助が最も高い。後に朝鮮を風靡して、鬼上將と飾がられた清正——さらに其後、江戸は櫻田外の邸から、馬で乗り出すと、市民は群集して驚異の目を、その偉

大な體格に躍つたといふ加藤肥後守——それが虎之助なのである。

だが横にガツチリしてゐるのは、市松だ。

この兩人の武骨にひきかへて、佐吉は美貌で有名な三成の前身だから、水みづしい色若衆だ。

すると、唯ひとり平凡なのは片桐助作だが、これも傍が普通とちがひすぎる異常少年どもだから、

彼、助作が平凡にも見えるのであつて、もし一般の青少年の間に伍せば、彼にしても決して凡庸どころではなかつたらう。

助作もまた賤ヶ岳では、七本槍の一人だつた。石田・加藤・福島のやうに二十萬石級の大名に躍進

するといふ華々しさこそ持たなかつたが、小身ながら大坂で、秀頼の傳役をつとめて史上に名を留め

た片桐且元が、これだ。

この助作が、スタートを縮尻つた。

固くなりすぎたのである。自分より四つも五つも年下の者に、後れをとつては、恥辱だと思つたか

らだ。

一ばん走り出しの宜かつたのは、例發で機敏な佐吉であつたが、間もなく市松に抜かれた。だが市

松は、虎之助に抜かれた。

出端に後れた助作は、焦つた。

(脚の筧棒に長い虎之助には、負けても仕方ないとしても——太つちよの市松には負けたくない。ましてや優形な、女みたいに色の生白い、佐吉にまで先を越されては、なんとしようぞ！)

しかし、焦れば焦るほど、思ふ半分も脚が利かないのだつた。

(あんな奴に、屎ッ！)

と、氣持は彌猛に頑張つても——佐吉にさへ追ツつけない。

わるかつたことには、主人秀吉が、

「そヲれ助、助つ！ 後れるなツ！」

と、背ろから喚ばはりながら、自分も競走者どもと一緒に走つて來る。

「佐吉、しツかりしろツ！ 市を抜き返せ！」

と、聲援したり、

「市も、頑ばれツ！」

と、市松へも聲を掛けて遣りながら、ちんちくりんの赤ピロウドが走る。

走れることは大得意の秀吉だから、餘裕綽々と、聲が出る。

なにしろ草履取の頃は、馬術の天才信長の、駿馬に跟いて韋駄天走りをして、走り慣れた秀吉なのであ

る。三十歳以後は、走る脚力が、やゝ衰へたと云つても、まだまだ大したものだ。

競走路が、幅三間の軍用道路であることは、前に云つて置いたが、この道路の北側——すなはち小谷側には、高さ一丈の塙壁が築かれてゐた。これは敵の鐵砲彈から、味方を安全に防ぐための、防壁であつた。

防壁によつて衛られた道路は、疑々として延長三里——虎御前山から横山城まで續くのだ。

秀吉は、小谷の淺井を封じこめ、越前の朝倉が出撃するのを遮るために、長蛇のやうな防禦線を、築いてゐたのだつた。

(三)

淺井・朝倉を完全に封じこめて、美濃と江州の國境、伊吹山の麓、柏原から湖畔の長濱に至る一線の南へは、彼等の軍行動を、許さないといふ建前をとつた信長は、この封鎖を秀吉に命じた。姉川合戦で、ほとんど致命的な大打撃を蒙つた淺井・朝倉は一時は再起不能とさへ見えたが、そのとき直ぐに止めを刺すことが信長には、出来なかつた。四方八方を敵にした爲に、忙しすぎて手が廻らなかつたのである。で、秀吉を長濱の城主にしたのは、江北の探題として彼に、北面の防備を一任するといふ意味だつた。

(あいつなら、うまくやれる)

信長は、さう思つたし、

(自分ならやつて見せる)

と、いふ自信が秀吉にはあつた。

委せた方も太い腹だが、引き受けた度胸が豪い。

敗れたりとも雖も朝倉は、越前一國の太守で、本願寺とは親戚だし、その領土は、まだ、寸地も失つてはゐないのだ。また淺井にしても、姉川合戦で受けた損害は、朝倉以上で、所領も兵力も、半分すきは減つてゐたけれども、本城小谷の要害に據つて、恢復の機をうかがふ氣魄は、侮れないものがあつた。

それを長濱五萬石の力で、封鎖しようといふのだから、尋常一様な手段では駄目だ。

しかし秀吉には、成算があつたのである。

蜂須賀小六などは、主人が此の大任を、まるで花見の支度でも引受けるやうな顔で、背負ひ込んだ時、躍起になつて、

「殿、輕はずみも品による！」

と、諫めた。

「鯨餅立ちの綱わたりなんかは、見てゐる方がハラハラするよ」

秀吉が、頓狂じみた顔で云ふと、

「殿つ！ お前様からが危い綱渡りだと、さうお考へなさるやうでは、てんでお話にも何も成りはせんツ！」

「話に成らんと思ふなら、黙つておいで」

「殿つ！ 朝倉は領土八十萬石で御座るぞ」

「やツぱり話かしたいのか」

「小谷の浅井領もなほ、十五萬石はあらうし、合せて九十五萬石でござる」

「他人の米俵を數へても、身代は殖えないぞ」

「えい誰が米俵を勘定いたした？ 敵聯合の大軍に對して、わづか二千の兵で合戦が、叶ふと覺すのか？ この長濱に御籠城なさるにしても、どれほど保てませう？ よしんば、長籠城が出来たにして

も、敵は一萬人で城を圍んでおいて、二萬人を、さつさと南へ進める」

「蜂須賀、おれは合戦も、籠城もする氣はないよ」

「え？ なんと云はれます？ 合戦も籠城もせずに敵が、ふ、ふ、防げまするかツ？ ば、ば、ばかな！」

「ばかなは俺の文句だよ、なんぼ泥棒上りでも、無斷でさう人の物を奪るのは止せ」

「殿つ！」

「まあ見てをれ」

合戦も、籠城も、どちらもせずに敵の大軍を、喰ひ停める爲に、秀吉はこの軍用道路を築いたのであつた。

それは道路であると同時に、謂はゞ三里の長城でもあつた。防壁の外側には廣い濠が掘られて、姉

川の水が、引き込まれたし、通路は、幾つかの寨を連ねて、横山城と、一方は虎御前山を、そして一

方は長濱城を連絡させてゐる。

あつた。

それは道路であると同時に、謂はゞ三里の長城でもあつた。防壁の外側には廣い濠が掘られて、姉

川の水が、引き込まれたし、通路は、幾つかの寨を連ねて、横山城と、一方は虎御前山を、そして一

方は長濱城を連絡させてゐる。

あつた。

(四)

小谷の城の本丸から、見上げると、虎御前山は、すぐそこに、それこそ手も届きさうに近々と眺められた。

草木の翠緑が滴るばかりに濃くなる頃は、往々、光線や氣層の具合で、山河の景色が無闇と近く見えることがある。

長政夫人、市姫は、怨めしげな顔で、虎御前山を眺めてゐた。
谷を隔て、時立つ向ふ山と、城との距離は、鐵炮彈の届くやうな近さではなかつた。だが、今、夫人の心には、その向ふ山から、やがて射撃が此の本丸の曲輪うちへ、浴せられるやうな錯覚が起るのだつた。

「お母アさま！」

駆けて来る可愛らしい足音がして、

「なにを見ていらつしやるの？」

形に似合はぬ早熟た口の利き様——五歳になる茶々姫だ。

浅井長政と、夫人との間には、三人の女兒が生まれてゐた。

五つを長らに、四歳と二歳だ。

三人とも行く末どんなに美しい女になるだらうと、誰しも思はずにはゐられないやうな、天稟なのである。

とりわけ長女の茶々姫は、後の國色無双の嬌やかさが、豊太閤の身をも魂をも、蕩かすことなる淀殿であるから、梅檀の香は双葉よりの譬ひどほり。

じつに美しいのだ。



「お、お茶々か」

「いくさは、いつ始まりますの？」

幼稚い心にも、戦闘は苦になるらしい。

「いつ始まらうと、姫は戦のことなど、氣におかけでない。姫がお母アさまのそばにさへ、おいでなら、なにも怖いことは無いのですよ。ね、おわかりかえ？」

「でもお母アさま、あのお山の上にある敵の大將は、とても怖いお猿なんぞでせう？」

「いゝえ、怖くは無いのです」

「あら、さう？ でも、怖いお猿だと皆が云ふんですもの！」

「さう云ふのは皆が、知らないからです。たかどお猿ですもの」

「さうか知ら？ でもお母アさまお猿のくせに、敵の兵士の大將なんぞでせう？ すむぶん強くないと大將には成れないことよ」

「まあ姫が、理窟をお云ひですこと！」

夫人は、淋しげに微笑んで、

「あの山の砦にゐるお猿は、ちつとも強くないのですけれど、たゞ大層悪智慧があるので？ それで何時の間にか、あんな大將株になれたのよ」

と、云つて聞かすのであつたが向ふ山——虎御前山に砦を築いてそこから朝夕、この小谷の城を目の下に、見おろし、見はつてゐる敵將、木下秀吉は、夫人にとつて怖くないどころか、今は世の中で何人よりも恐怖すべき人物だつたのである。

怖ろしいからこそ、悪智慧で出世したといふやうな悪口も、つい出てくる。

これは決して夫人だけの心理ではなかつた。小谷城に籠る、浅井の將士は、一人残らず、秀吉を恐れた。

虎御前山から長濱までの三里の間に、道路が出来、塙が出来、濠が穿られた時は、

(なアんだ、馬鹿な事をする！)

と、嘲わらつた人々であつたが、さて其の大土木が完成した晩には、おぼえず苦楚の呻き聲を洩らした。

虎御前山から城内を、目の下に見おろされる辛さは、全く堪らないものだつた。

(五)

山上の崖縁に、突き出てゐる望樓には、鞭を持つた秀吉が、竹中半兵衛と話しながら立つてゐた。

望樓から、碧の武者走へおりの下り口の、階段に、仲よく並んで腰掛けてゐるのは、先刻、競走で先着を争つた四人の若者だつた。第一着は虎之助、次ぎが市松、第三着は、やうやく佐吉を抜くことの出来た助作だつた。佐吉は、自分がドン尻に落ちたことなどは、まるで平氣であつたが、助作は虎之助と市松に遙か及ばなかつたのを、心の中では泣きたいくらい無念だ、殘念だとは思ひながら、口惜しさを面に現せば、かならず叱られて、恥辱の上塗りを重ねなくてはならぬので、ちいつと辛抱して、無理に笑顔をつくつてゐるのだつた。

(年齢からいへば、自分だけが青年なのである。元服して且元と名乗つてゐるではないか。ところが彼等は形こそ大きくても、まだ少年なのだ。——あゝ何と俺は意氣地なしであらう?)

助作は、土岐家の浪人だつた父に、幼いころ死別れた孤兒であつたが、竹中半兵衛のおかげで、秀吉の側近くに勤めることが出来た。後に相違なく役に立つと、半兵衛が保證して呉れたのだ。

竹中の眼識に曇りは無かつたのであるけれど、なにぶんにも朋輩の三少年といふのが、途徹もなく傑出してゐただけに、助作は割がわるかつた。

こんな三少年にぶつからなければ、助作は、もつと遙かに光つて見えたらう。

じつさい、それに違ひなかつた。虎之助と市松、それに佐吉と、揃ひも揃つた麒麟兒を、怎うして秀吉が膝下に集めたかといふと——

佐吉の場合は全く偶然だつた。

だが、虎之助と市松の場合は、決してさうではなかつた。なぜかといへば、虎之助は、秀吉と同郷の、尾張中村の鍛冶、五郎助の子であるが、父五郎助は、秀吉の母と従姉弟だつた。——また市松の父は、この五郎助の従弟で、おまけに市松の母は、五郎助の叔母であつた。

だから、虎之助と市松とは、再従兄弟で、どちらも秀吉とは骨肉の間柄なのである。

してみれば、猿面藤吉の秀吉が、すばらしい出世をとけて、墨股の城主となつたのを見れば、たとひ天稟に何等傑れたものを恵まれない少年でも、青雲の志望を持つたでもあらう。いはんや虎之助も市松も、たしかに稀な素質を享けて生れた少年だつた。で、どちらも年十歳で、秀吉のそばに、引きとられた。

後年の驍將、加藤清正、福島正則の出仕の初めは、このとほり偶然ではなかつた。

ところが佐吉は、血縁の關係も、郷里の繋がりも無い、全く路傍の寺小姓が、ゆくりなくも秀吉に見出されたのであつた。

長濱五萬石の大名になつて間もないこと——秀吉は、領内巡視の路すがら、咽喉が乾いたので、伊香那古橋村の、三珠院といふ法華寺に立ち寄つて、

「白湯が所望ぢや」

と、云つた。

住職が、お茶を差上げませうと、答へたのに對して、

「いや茶よりも白湯が欲しう」

秀吉は、湯を呑みたかつたのである。

(六)

住職が、

「でも御前様、白湯は味無う御座りませうに。しばしお待ち下さりませ、只今お茶を立てまする」

さう云ふと、秀吉は、

「住持、渴した折は、白湯にかぎるよ」

と、重ねて所望したので、住職は寺小姓の佐吉に云ひつけて、領主に一盞の白湯を献じさせた。寺小姓の差出す湯を、一息にグツツと飲みほして、

「もう一つ」

と、二盞目を注文した。

(こんな山寺には、めづらしい美少年だな)

秀吉は佐吉の眉目かたちの優美なのに、心をひかれながら、二盞目を飲むと、こんどは、前より少し熱かつた。

「もう一ばし」

第三盞は、さらに熱かつた。

で、さすがに渴してゐた喉が、心地よく乾きを忘れて、たんうしたので、

(この子は、尋常な小姓ではないぞ！)

と、思つた。

「たゞいまの湯は、そち自ら汲んだのか？」

秀吉が、さう訊ねると、自分で汲んだのだと答へた。さもあらうと心で點頭きつゝ、

「この童は、何者の子かかう？」

住職に問ふと、

「坂田郡、石田村の住人、石田藤左衛門正繼の次男坊で御座ります」

「あゝ左様か。名は何と云ふ？」

「佐吉と申しまする」

「その石田とやらは浪人か、それとも郷士か？」

「もとは、京極家の家臣で御座りましたが、主君の家が淺井氏のために滅ぼされましたので、先祖代々の墓所の地、石田村に棲むことゝ相成つた次第で！」

秀吉は、この美童の才智が氣に入つたので、素姓などは怎うあらうと宜かつたのである。

年齢を訊いてみると、十二だといふ。

すでに十四五歳かと思つて秀吉は、いよいよ感心を深めて、自分の小姓に貰ひ受けたいと、云ひ出した。

(乾いてゐると聞いて、まづ、ぬるい湯を一氣に吞ませ、次ぎに熱いのを、最後にはもつと熱いのを獎めた機智は、ほんたうに頼もしい。これを仕込めば、將來は——)

必ず天晴れな器になる。

秀吉は、屬望したのである。

こんなわけで、ひとつの偶然が——三珠院の寺小姓を、長濱の城内へ送つて、虎之助や市松と、起き臥しを共にさせた。

佐吉が愛されたのは、その才能のためであつた。その點が虎之助や市松と異つてゐた。

「虎も、市も、體が資だぞ」

秀吉は、この兩少年に對しては、拔群の武勇を期待した。

惻愾な佐吉には、主君の氣持が、よく判つた。だから彼は、體力や武藝で劣つても、さつぱり苦しめないのだつた。

で、今も、競走に負けて、ドン尻になつても至極朗かであつた。

「わたしは思ひのほか走れた。あんなに走れようとは、自分に豫想も出来なかつた」

佐吉が、さう云つて微笑んだ時、

「四人とも、こゝへ来て見ろ」

と、秀吉が招いた。

「は」

虎之助が先に立つて、近づく。

(七)

競走の出發線では、年齢の順に並んだが、いま秀吉に呼ばれた時は、虎之助が最初に立つて、それから助作、あとに佐吉と市松が続いた。

今だけではなく、いつもこの順なのだ。特に秀吉から指圖の無いかぎり、まもられた此の順序は、なにを標準の順かといふと、それは知行順なのであつた。

知行五百石の虎之助が、先頭。

つぎの助作が五十石。

佐吉と、市松は、無足。

無足といふのは、全くの部屋住みで、無祿——すなはち知行を貰つてゐないのである。

十四歳の佐吉と、十三歳の市松とが、まだ知行に有りつかずに、無足であるのは寧ろ當然だが、不思議に思はれるであらうのは、市松と同年の虎之助が、五百石で、年の五つ多い助作の知行五十石に比べて、ちやうど十倍嵩もらつてゐることだ。

もし虎之助が、特別な身分か、關係かを持つてゐるならば兎に角、秀吉に對する繋がりには、前に云つて置いたとほり、市松とおよそ同様なのである。

つまり、どちらも母方の親類で、鍛冶屋の子と、桶屋の子であるから、どう違つたところで知れたものだ。

それにも拘らず、桶屋の子が無祿で、鍛冶屋の子が五百石とは何故か？
十三歳の虎之助が、五百石を得たことには、面白い話がある。むろん側路へ這入るわけだが、或る

日のこと——

長濱領と、小谷領との、境目に近い村の居酒屋で、身長六尺ゆたかな浪人が、大きな榊に、口を直かに付けて、ぐいぐい冷酒を煽つてゐた。

體も大兵肥満だが、榊も巨大い。その巨大いので、地酒の斗酒を傾けては、どんな酒豪も酔はぬ筈がない。

「ううい！ 一榊目は、爵を散ずる玉簪だが、二榊目となると、どだい天地が狭くなつた。ううい！
だが三榊目、さらに此世を此世とも思はなくなつたぞ、わツはツは」
傍若無人に獨り悦がつて、榊を重ねる。

零落て困窮の服装である。しかし、腰の大小は相當なものらしい。

この腰の物に目をつけたのは、
同じ店さきで、これも頻りに、杯を重ねてゐた色の黒い、身の丈は五尺あるかなしの小男——やはり零落の浪人だが、眼つきの鋭いこと。

一癖も二癖もありさうな、決して尋常ではない骨格だ。

居酒屋の亭主は、すでに飲み倒される覺悟をしてゐたのであつたが、倅ひなことには、兩人とも無一文ではなかつたと見えて、代錢を拂つて、出て行つた。——大男の方が、先で、稍おくれて小男が

立ち去つたのである。

足もとも蹠蹠と、定まらぬほど酔つた大男は、路ばたの並樹の下まで行くと、涼しい木蔭の草の上に、地響きうたせて横になつて、

「あゝ宜い氣持だ、これこそ極樂世界、眼のあたりといふ奴だ！」
と、云ふかと思ふと忽ち、グウグウ舂、高々と熟醉してしまふ。
そこへ小男もまた千鳥足で、ふらふら。

「ちえゝツ！」

叫んだ時は、草の上の、大男の臥した軀へ、撞ツと重なつて倒れかゝつた。

「やい起きろツ」

小男は、怒氣ものすこく身を起すが早い、さう嗚りつけた。

(八)

「ううい、何ぞ用か？」

「えい起きると申すにツ！」

「厭だ！ 起きれば目が覚める」

「えゝ痴け奴ツ、往來に晝日中、ダラシなくぶツ倒れて、剩つさへ通りかゝつた拙者の足に絡まつて引き倒すとは言語道斷ぢや、立てツ！」

「な、なんだと？」

大男は、やつと起き返つて、

「今一度、ほざいてみる！」

「おのれ拙者を、引き倒したぞ。弓矢八幡、堪忍はならぬから、さう思へ！」
小男が叫ぶと、

「ウヘエ、！ とんでもない理不盡を吐くぞ、此奴！ おれが心地よく一睡の夢を結んで、此の世では娯せぬ樂しみ眞最中に、邪魔ひろいで、土足に掛けて、面白い折角の夢を踏み、破りをつけて、詫びでもするのなら兎も角も、あべこべな逆ねぢの悪口雑言——えゝ怎うするか見ろツ！」
六尺あまりの大男は、ぬツくと突ツ立つたのである。

「なにツ？」

と、小男は鋭く身構へて、

「怎うするか見ろは、此の方の言ふ事だツ！」

「黙れ！ 片手にも足りぬ小伴だが、今後のために、その兩足をへし折つて、或る豪傑に出逢つた時
教訓された臉が是れだと云へる様にして遣はさう！」

仁王の腕みたいな双腕を擴げて、とび掛かる。

「えいッ？」

と、小男が抜き打ちに切りつける。たツと躲して、大男も抜き合はせる。兩方とも酔つてはゐても
白刃を把れば見事な太刀打ち。しやりんと合つて、颯と離れる鈍子と鈍子。散るは火華、一進一退、
たがひに早業、急速の秘術を競ひつゝ、凌がうとするが凌がせない五角の技と技——

優秀、いづれとも解らない時、通りすがつたのが加藤虎之助だつた。

虎之助は、つれてきた足輕どもへ。

「あの果合ひを止めさせるツ！」

と、云ひつけた。

領内巡視の目付を、秀吉に命じられて在々、村々を、廻つてゐた道すがらだつたのである。

足輕どもは、多勢を待んで兩人を引き分けようと構めいたが、争鬭に心をとられた浪人同士は、耳
にもかけず切り結ぶ、そのうちに足輕どもは、手に手に長い棒だの、棒だのを持つてきて、叩き立て
押し隔てようとしたので、

「やあ禮儀も知らん賤しい奴原ツ！ 片附けてから勝負せう！」

小男は、さう叫ぶと同時に、相手を捨置いて、足輕どもを追ひ散らしに掛かつた。

この時、虎之助は大男へ聲をかけて、

「やあ酒に性根を亂したとは見えぬ刀の、お手のうち、あつたら器量の御兩人、意気は何か語られよ

わたしは加藤虎之助と申す、この長濱の城内にて、小姓を勤むる總角の弱年者、當年わづか十三歳な

がら、承はつて理否が判らば、あらためて勝負致させ申さう！」

と、喚ばはつた。

「なに？ 十三歳でそのノツボか？ 偽をつけッ！」

大男が罵ると、

「えゝ無禮なツ！」

虎之助は、飛鳥のやうに大男の、手元を自がけて跳び込んだのであつた。

(九)

朝鮮の鷄林八道を震撼して、大明までも怖させた加藤清正の武勇は、まさしく天稟で、少年虎之助